
雑種のどこが悪い！

ユーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雑種のどこが悪い！

【Nコード】

N6564F

【作者名】

ユーマ

【あらすじ】

モンスターハンターに登場する祖龍ミラールの息子に生まれ変わったしまった。ドラゴン人生を楽しく生きようと頑張るが……。危険の多いモンハン世界でどう生き残るのか。

第1話：目覚めの悪さ（前書き）

はじめまして。こんにちわ、投稿初心者のユーマが、モンスターハンターの二次創作にいどみます。

また、この小説はモンスターハンターに登場するモンスターの生態や種族、ハンターの行動、などを作者が捏造、改変しています。

第1話：目覚めの悪さ

目覚めの悪い時、寝ぼけて物にあたり後で後悔するタイプがいる俺だ。

「痛い。苦しい。暑い」

3拍子揃った寝心地の悪さに、俺は、己の枕に苛立ちをぶつけボコボコに（余談だが、俺の枕は今13代目だ）するために勢いよく頭を上げた。

ガーン、バキバキバキ……

「いでー！俺、何に頭ぶつけたんだー。ぐわっ、眩しい」

痛さと眩しさで閉じた目をこする為に腕を伸ばした。……届かない。何故だ！ 気合いで目を開いて自分の腕を見た。

………はい？ 人間の腕じゃない。ゴツゴツとした鱗に覆われ、指先には鋭い鉤状の爪が伸びていた。

「……………」

人間、驚いた時には声が出なくなるとは正にこのことだ。

腕を凝視した状態で固まる俺。滑稽だ……。頭を2、3度

振り、冷静になろうと上を見上げた。

巨大な化け物と目があった。

「ギャアアアアーーーーー！！！」

今度は思いっきり声が出た。 何かに引っかかり後ろに転げ出た。

あつ俺、卵に入ってたんだあゝ。って違う！ なんだこれ？
誰か説明してくれー！。

パニックに陥り必死に逃げようともがくが、手足が思うように動かず、その場から全く進まない。 バタバタと手足を動かしている、巨大な化け物が口を開けて首を伸ばしてきた。

一一喰われるっ

目を瞑り体が強張る。……気持ち悪い浮遊感に襲われ、目を開けると巢の様なものの上に下ろされた。

……喰われなかった。奇妙な安堵感から頭が冷静になり、巨大な化け物を観察した。

ミラルートでしたー。モンスターハンターに登場する祖龍でしたー。

……夢だ夢に決まってる。モンスターハンターは知ってる。学校でも流行ったし俺もPSPの1と2ndはやった。だから分かる！

あの白い巨体は間違いなくミラルートだ。 実在するわけない。
ゲームのラスボス的存在だ。

頭の中で現実逃避をしていると、ミラルートはのそつと起き上がり翼を広げて何処かへ飛び立っていった。

「はは、なんだこれ、俺ドラゴンになっちゃったよ。しかもミラ
ルートどっか行っちゃったよ。……………夢よ醒めろー！ー！」

バタバタと暴れ思いつきり自分の尻尾を踏みつけた。 痛かつ
た。つまりこれは現実だ。

第1話：目覚めの悪さ（後書き）

最後まで下手くそな文にお付き合いいただき、どうもありがとうございます。
ございました。また来ていただけると、とても嬉しいです。

第2話：意外なこと

たぶん状況からして、俺はモンスターハンターの世界に転生したらしい。しかも――ミラルーツの息子として――

認めよう。いや、本当は認めたくないが、どうすることもできない、考えようによったら結構面白そうだ。前の人生はたぶん終わったんだ、きつと俺は寝ている間に死んだんだ。

そう思うことで、心の整理をつけた。そうしないとやっていけない気がした。

うじうじ悩むのは好きじゃねーしな

――自分の体を隅々まで見て気づいたことがある、体が全体的に黒っぽい。なんだかくすんでいて汚らしい。そして現在の大きさは大人人間と変わらない。……横に転がった、人間の白骨化した死体から分かった。

泣きたくなった

――――とりあえず、暇なので体を動かしてみた。手足をバタつかせ、なんとか二本足で立つことに成功した。そのまま前に歩いてみる。2歩目で転けた。

体の動かし方になれた頃、ミラルーツが帰って来た。今日から俺の母さんである。何かをくわえている……イヤンクックでした。でけー

ドシンと巣に落として、俺のほうを見る。

……俺にどうしろと……食べろってことか!? 無理だデカすぎる。

不思議そうに顔を傾げ、何かに気づいたようにイヤンクックに近づき肉を引きちぎり俺に差し出した。

目の前のバイオレンスな光景に顔が引きつり後ずさるも、差し出され肉を前にどうすることもできず、とりあえず口に入れた。

「うめえー!」

さっぱりとした味に絶妙な柔らかさ、そして後味のよさ。空腹からか、かぶりつくように腹がいっぱいになるまで食べました。

お腹がいっぱいになると眠くなるのは産まれたばかりだからだろう、睡魔に負け眠りに落ちた。

――――何かにつつかれる、うるさいとばかりに尻尾で叩いたら、もっと強い力で体を掴まれて目が覚めた。

起きたら十数メートルの高さでした。母さん、俺が悪かったから降ろして下さい。

起きたら咽が渴いてきたので水を飲むべく辺りを見回す、……ない。雰囲気からして、明らかに洞窟です! っを感じだ

「あのー、俺、咽渴いたんですけど、どうすればいいでしょうかー」

とビビりながら話しかけた。母さんだとは分かっているが、まだ怖い、踏み潰されたら一発で御陀仏だ。

生後1日で死亡とか嫌すぎる。

じーっとな数秒間視線を合わせる

「グルル（背中に乗りなさい）」

しゃべった。いや俺が理解したただけか、じゃあ俺が今まで話していた言葉は何だ？ 人語か？ そうか！ だから、あんなに見られてたのか。やべー…… もう人語は使わないようにしよう。でも俺は龍語使えるのか？

「わ……ぐふん！グ、グルル（わ、わかった）」

なんとかできたが……まあ大丈夫だろう。マジでこれから人語は止めよう、危険だ。

母さんの背中によじ登り毛にしがみつく

「（いくよ）」

バサバサ っと勢いよく羽ばたかせ、広い洞窟を飛び出した。

「きえー（うぎゃー、怖いいい）」

絶叫系が駄目な俺には地獄でした。

安定した飛び方になると景色を見る余裕ができたので辺りを見る

と、古塔が見えました。 ああ、やっぱり古塔の近くだったんだと
変に感心していると、母さんが高度を下げて湖に降り立った。 ゲ
ームには登場しない湖で、太陽の光を反射して、とても綺麗な場所
だ。

湖ひゃっほーい！と飛び込もうとしたが、母さんに捕まった。

「グルルウ（水辺にはガノトトスとか敵もいるから無闇に飛び込ん
ではいけません）」

そうでした、ここはモンハンの世界でした。ちょぴり自分のアホ
さに落ちこんだ。

警戒しつつ水辺に近づき水飲んだ。そういえば、自分の顔はみた
ことないなと水に自分を映して観察してみた。

おおーなんだか顔の作りが丸くて可愛いな、正に子供って感じ
だな！ どれどれ…おおっ！牙もちゃんとはえてるな、角も…3、
4、5本生えてるな。…5本？あれ、ミラルートって4本じゃな
かったけ…。

「グワーーーー！！（なんでじゃーーーー！！）」

よく見ると眼も翡翠色だし、なんか変だあ！

水面を見てばったばった暴れていると、母さんが水から上がって
きて不審そうに俺に近づいてきて声をかけた。

「（どうしたの？）」

「（おっ俺変だ！なんか5本角あるし眼も翡翠色だ）」

母さんが俺のことをじっくり観察してから、ああ、そうだ！つと

「（お父さんがミラボレアスだからじゃないかしら）」

つと言った。

——えええー！、俺ミラルートじゃないのかー！ーじゃんんだ、新種か？ だから体黒ぽいついのか。ミラルートが一番好きだったので、ガツクリしていると、

「（眼の色もキレイだし、角も5本もあってカッコイイわよ）」

「（ありがとう、母さん）」

母の愛を感じた瞬間だった。

帰日も母さんの背に乗り絶叫体験をして帰り、俺を巣に降ろすと、母さんはまた何処かへと旅立っていった。

ポツンと一人になった俺は暇なので洞窟内を探索してみることにしたのだが、巣は鳥の巣と変わらず、ただ木や骨など色々積み重なってになって超巨大になっているため、ちよつとした壁となって俺の前に立ちはだかる。

ヨジヨジ、ズザー

蟻地獄のようにぬけられない

ヨジョジ、ズザー……

ぷちっ

「グアアアアー（だあらセエエーイ）」

ドドドドド　　ガシッ

なんとかへりに掴まることに成功し、体を持ち上げる、結構な高さである。飛び降りられなくもないが、足は痺れそうだ。

翼を広げてみた。羽ばたく！……飛べるわけなし、とりあえず翼を広げたまま飛び降りてみた。

ドン、　ズザー…

足は痺れ前のめりに倒れ腹を擦った、鱗のお陰で痛みはなかったが眼に砂が入った。手が届かないので涙が流れたので、翼の膜で顔をこすりつけて拭った。

なぜか惨めな気持ちになった。

さて、気を持ち直して辺りを探索しようとうろウロ洞窟内を徘徊し始める。

んー、何も無いなあー…おっ、ここピッケル使えそうだな。ん？これハンターの太刀か、げっドロクロ発見、体の骨は見当たらなかった…母さんに喰われたか…

背筋に冷たい汗が流れたので、探索中止と思い巢へと歩く。

——俺は人が喰えるのか：いや攻撃できるのか——

考えに没頭していて全くといっていいほど、周りに気を配って
なかった。いや洞窟内ということで元々気なんか配って
いなかった。

カサカサカサ ひゅっ ドス

「ギャー！（いっでー！）」

後ろからカンタロスに思いつき刺されました。ヤバい産まれて
1日しかたってない鱗じゃ防げない。

「（ヤバい、ヤバい、どうする攻撃してみるか？）」

ブレスを吐くため、胸いっぱい息を吸い思いつき吐き出した。

「グアーー（イケエー）」

ポヒュっ……

変なん音とともに白い煙が出ました、ブレス無理でした。カンタ
ロスもポカーンとし数秒の間見つめ合う。

ダッツと俺は巢へ駆け出す、巢によじ登れば、たぶんいける。カン
タロスも後ろからバツタ跳びで迫ってくる。

ドドドド、ガシッ

「(よっしやー掴まれた《ザク》って、いでー！)」

巢のへりに掴まった瞬間を攻撃され、そのまま落ちた。

ベシヤ……

「(あっ……)」

カンタロスは俺の体の下敷きになりぺしゃんこに潰れた。そして俺の体にはカンタロスの体液で汚れた。

母さんがランポスを捕まえて帰って来たが、カンタロスの体液でベタベタの俺見て溜め息を吐き、仕方なさそうに俺を背に乗せまた湖へと連れて行った。

第2話：意外なこと（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございます。

第3話：初めての感覚（前書き）

こんにちわ、今回はバトルが入ります。

第3話：初めての感覚

――― 生まれてから2週間 ―――

順調に大きくなり、3回の脱皮をしドスランポスよりも一回り小さいぐらいのサイズまで成長した。

しかし、脱皮とゆうのは、かなりむず痒いもので、ピラピラと皮がめくれ、無理やり剥がそうとすると下の鱗まで剥がれそうになり、かなり痛かった。

大人になれば数年に一度のペースで脱皮をするらしく、痒みも酷いものではないらしい。

子供は鱗自体が薄いからではないかと考えられる。

大きくなれば食べる量も増える。

今では1日でランポス1匹ぶんの肉を食べる、更に母さんはキノコなんかも採って来てくれるので、それも食べる。

中には、毒キノコや麻痺ダケなんかも混じっているが、幼い頃から毒や麻痺など状態異状の耐性を強くするためらしい。

最初是不味くて、体調が悪くなるだけだったが、だんだん慣れて癖になる味であることが分かった。

体の中で一番大きく成長したのは、なんといっても翼だった。

最初はシワシワだった膜もピンと張り、翼を広げて羽ばたくと空気を掴む感覚が分かりフワリと数メートル上昇する。

自分の力で空中に浮かぶことが楽しく、1日の大半を空を飛ぶ練習に使っていた。

次に好きなことは、ブレスの練習だった。

最初は炎どころか、白い煙ばかり出たので母さんに教えて貰うことにした。

最初は自分で頑張りなさいと、教えて貰えずにいたが、俺がめちやくちやに吸う吐くの繰り返しをしていて呆れられ、教えて貰えた。

まずは大きく息を吸い、胸に力を込めこの時に頭で雷を息に混ぜる様にイメージして勢いよく息を吐き出す。

ボンッ

と、青白い電気の塊が数メートル飛んだ
これを繰り返し、練習すればもっとスムーズにかつ強力なブレスが吐けるようになるそうだ。

今では、数十メートル先までとぶようになった。

そして今日から、俺は獲物を捕らえる訓練が始まった。獲物を捕まえるといっても、母さんが捕まえて来たランポスなどの比較的に弱いモンスターを俺がトドメを刺すということらしいのだが、初めての対戦に緊張していた。

母さんが生きたままのランポスを洞窟内へ放した。

俺は最初にブレスでランポスを狙って攻撃を試みる

「ガアー（オラアー当たれー！）」

ランポスも死に物狂いで避けこちらに攻撃を仕掛けてくる。
大きな口を開け、噛みつこうと迫ってくる

「(のわゝひえゝゝ)」

と空を飛んで避け、そのままランポス目掛け体当たりし、吹っ飛んだランポスにブレスをくらわして殺した。

――前の世界では殺生とは無縁の世界だったため、初めての自分で【殺し】をしたことで、罪悪感に苛まれるかと思っていたが、残ったのは高揚感だけだったことに驚いた――
2週間の間に何度もモンスターの肉を食べていたためだと、自分なりに考え納得した。

この世界では弱肉強食の世界だからだ。

「(俺も、この2週間でだいぶこの世界に馴染んだってことかな)」

と小さく呟いた。

もちろん母さんには聞こえなかったらしく、俺の初めての狩りについての評価を教えてください、及第点という厳しいものだった。もっとブレスの命中精度を上げるようにと言われた。仕留めたランポスは親子で仲良く食べる、しかし母さんには少し小さい獲物だったようだ。

「(母さん体デカイから、こんなじゃ足りないよねー)」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら言うと、

「(うるさいよ)」

と、俺は母さんに翼で叩かれて後ろに吹っ飛んだ。

まあ、体も頑丈になっているのでこれくらいなら傷つかないが、結構痛かった。

それから母さんは、ゲネポストとブルファンゴを捕まえて来て俺と闘わせた。

ゲネポスはランポスと変わらずに体当たりをしてからブレスをくらわして仕留めたが、ブルファンゴは猪突猛進に突っ込んでくるために、何回か横に転がって避けそれから空中へと避難した。それでも、ブルファンゴは俺の飛んでいる下に向かって突進してくるので、向かって来たところを空中からのブレスで仕留めた。

この2匹は仲良く母さんのお腹の中に納まった。

――今回の戦闘で、ゲームと違ってモンスターも必死に避けたり攻撃を仕掛けてくることが分かった。

俺は改めてこの世界がゲームとは違う現実であると強く感じた。

――

第3話：初めての感覚（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

第4話：悲しみの咆哮

――― 生まれてから1ヵ月と2週間―――

メキメキと大きくなった俺は、大体ドスイーオスぐらいの大きさまで育った。後ろ足もがっしりとした筋肉が付き、翼は生まれた時の二倍の大きさにまでになっていた。

翼が大きくなったお陰で大分自由に空を飛びまわれるようになり、2週間前からは近くの水飲み場である湖も自分の翼で行くようになっていた。

狩りも母さんに付き添ってもらっているが自分で森に行き、自分の食べる分は捕まえるようになった。

まあそれでも、イヤッククックやリオレウスなんかは倒せるわけもなく、たまに母さんから分けて貰っていた。

だって、めっちゃくちや美味しーんだもん。リオレウスの胸肉なんか、めっちゃ引き締まってて味が濃くて美味しいのなんのって。尻尾なんかは一種の珍味だね、止められないね。

そんなこんなで、今はブレスの訓練中と洞窟の入り口から狙いを定めて外を飛んでるガブラスに向かってブレスを撃つ。

ドカーン、ドカーン

「ギャアアア………」

「（ふう、これで2匹目）」

と、大分スムーズに撃てるようになったが、どうやら俺は射撃

センスは無いらしく、5発〜7発目で一匹仕留める。ガブラスも結構遠くを飛んでいるが、それでも母さんが撃てばほぼ間違いないで一発で仕留める。

母さんの才能はどうやら受け継がなかったらしい。

……これからも練習すれば！練習を再開しようと息を吸い込んだ時、母さんに声を掛けられ、そのまま振り返りブレスを母さん目掛けて発射してしまった。

ドッカアーーン、っと盛大な音をたてて母さんに被弾。

「(あっ…あの…母さん、ごっ…ごめん…)」

「(ごほん、大丈夫です、幸いにも『胸』に当たりましたから)」

にこりと静かな笑みを浮かべ、胸の部分を強調しながら笑っていた。ヤバイ…怒りのイカズチが降り注ぐ！

さっと、小さく身をかがめて落雷に備える。……何も起こらない。そうっと母さんを見る。

「(何をしているんですか、話がありますからもっと近くに來なさい)」

「(はっ、はいいいー)」

猛ダッシュで駆け寄り、頭の中では、ああ尻尾ビンタかぁと涙を流して母さんに近づいた。

「(は…話とは?)」

「(今日から5年間一人で暮らしなさい)」

は？今何と仰いましたか？……えーと、キョウカラ ゴネンカン
ヒトリデクラシナサイ……………今日から5年間一人で暮らし
なさい。

「(でええええー！！そんな、ブレス当てたことなら何度
でも謝りますからあー！ごめんなさいいー！捨てないでー
ー)」

「(違います、そのことは一切関係ありません(じゃあなぜ！)」
……いいから聞きなさい。我ら古龍種ミラボレアスは一人で狩ができ、
母親がこの子なら大丈夫だと判断したときから、5年間の修行を課
します。そして5年の修行が終わった後に奥儀である技を教えるの
です。)」

全く理解できません、つか死んじゃうよ？技なんか覚えなくても
生きていけるよ、5年間とか長くね？もう1週間でも長いぐらいな
のに、5年？笑えないジョークだぜ、マイマザー。

このモンハンの世界がいかに関係か理解して下さい。 モンスタ
ーうじゃうじゃ、ハンターうじゃうじゃ。もう駄目じゃね？死亡フ
ラグ5年で100本立てる自信があるぜ！

「(む、むむむ無理です！絶対無理！死ぬって、俺まだ生まれてか
ら1ヶ月ちよつとだぜ？母さん冗談が過ぎるよ)」

「(冗談ではありません、我らは誇り高き龍の祖です、日にちなど
関係ありません。お前なら大丈夫だから頑張っただけ。)」

にっこりと悲しそうに微笑むと、

「（これを持って行きなさい、無くしてはいけませんよ）」

と、俺に人の拳ほどの大きさの赤い宝石を俺の頭に近づけると、すうっと溶けて消えた。

呆然としている俺を捕まえ、ペイッと洞窟の外へと放り出した。

「（これより、5年間古塔周辺は立ち入り禁止です。守らずに近づいた場合、容赦しませんからそのつもりでいなさい。）」

そういうと、母さんは洞窟の中へと入ってしまった。

「（おっ、鬼ー！。悪魔ー！。龍殺しー！。）」

声のあらん限りで、罵ってみたが効果無し。もう、呆然とその場に座り込むしかなかった。

数時間その場にいて、やっと正気を取り戻すも、この世界で5年間一人で暮らすしかないという絶望感が襲う。

――腹を括るしかない――

俺は力強く立ち上がり、母さんに感謝の意を籠めて深く礼をし、翼を広げて空に飛び立った。

後ろから母さんの咆哮が聞こえたが、

振りかえらずみ真っ直ぐにと太陽に向かって飛び続けた。

第4話：悲しみの咆哮（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。
温かく見守ってやって下さい。

第5話：住み家と嬉しい物

じゃっかん、勢いとその場の空気に身を任せてしまったことを後悔しつつ。俺はとりあえず何処に行こうか悩んでいた。

何処行こうかな、雪山とか火山とかは却下だな。寒いし、暑いし、強いモンスターも出てくるし、そうすると必然的にハンターも強くなってくるから無理だな。

はあ……こう考えると行く場所なんて限られてくるか、いやでも何処も危険なことには変わらないが……。

いっそのこと、ゲームには出てこなかった場所に行くか。いやでも、まったく情報が無くてより危険か……。

「(あああああ!!もうヤダ!無理、無理、無理。やっぱさ、5年間って長いだろ)。絶対死ねってことだよ、マジ鬱だ……。)」

もう何処行っても変わらない気がしてきた、あははは、笑いが止まんねー涙も止まんねー

自棄になり、近くの岩に腰掛けて地面にあみだくじを書いて決めることにした。

「(ふんふんふん♪何処も彼処も敵だらけ、カ・ミ・サ・マ・ノ・イ・ウ・ト・オ・リ)」

自分でも何を言っているか分からない歌を歌いながらあみだくじ完成。

「(ん、どれどれ……こういつて、こうつと……い、いやいや神様。…『砦』っておまっ……そういえばあそこは、確かラオシャンロンとシェンガオレンしか来なかったよな?それにあいつ

ら、ほぼ攻撃仕掛けてこないし……。）」

案外イケるかもしれない、あそこの近くに俺が寝れるくらいの洞窟とか穴とか、とにかく場所さえ探せば、あいつらが来ない限りハンター達も来ない。

餌は少ないか…、イーオスとかいるくらいだったしな。狩りの為に遠出する必要はありそうだが、寝る時までずっと飛竜種とかに警戒しているよりはずっとマシだな。

「（水場とかあると嬉しいなあ、とりあえず行ってみますか。）」

ほんの少しだけ明日の希望が見えてきた。翼を広げていざ『砦』へ……！

————砦周辺————

見事に岩っばっかです。草とか木とかも疎らに生えてるけど、上

から見ると砦までの道のりは岩山をくり抜いて造ったって感じだな。すげーよ造った奴。

来る途中に捕まえたケルビを空中でバリバリ食べながら、砦周辺を空から観光している。あまり霧っぽくてよく周りが見えないが、数カ所から濃い煙がモクモクと昇っている場所を見つけた。

なんだこれと近づく。

「(おっ…おお温泉だあー！ヒャッホイ、ラッキー！なんだこれ、めつつちゃ高物件だな『砦』！)」

その場所は空からでないと近寄れないが、遠くの方まで一望できる最高の天然温泉があった。

「(ヤベー、俺専用のマイ温泉とかこれ最高だわ)。どれどれ、湯加減の方はと…はあ…、いい湯ですね)」

忘れ去っていた、日本の心だ蘇る。ちょっと、ホームシックにおちいる。

ボーっと湯に浸かっていると、太陽が大分大きくなり夕焼け空に変わってきた、

「(つつって、駄目だ！今日寝る場所探してねー。)」

慌てて、温泉から上がり空へと駆け出す。

探索を始めてから1時間半経過。ようやく温泉から飛んで15分ぐらいの場所に、岩と岩が重なり合い長い年月をかけて一つになった巨大な大岩にポツカリと空いた岩窟を見つけ、そこに住むことに決めた。水場や、巢の材料なんかを探さなければならぬが、長距離の飛行に疲れて今日はもう寝ることにした。

「グアックショー（ぶえーくしょーい）」

ドッカーン…パラパラ

「（あつ、やべ、くしゃみでブレス吐いてもう一つ入口造っちまった。誰だよ俺の噂してる奴は、しかしこんなカテー岩に穴が空くとはな、あそこの岩壁は薄かったのか？）」

――――ハンターギルド――――

その頃。ハンターギルドはある噂でもちきりだった、ラオシャンロンが目覚めた。

街に向かって進行しているために、砦にどのハンターが行くか誰が助っ人として砦に配置されるかで蜂の巣を突いたような騒ぎだった。

と、誰かがこんなことをもらした。

「せんぱーい、今日俺砦の見張り番だったんですけどね、遠くの方で飛んでいるガブラス寄り一回り大きいモンスターを見た気がするんすよ。」

「馬鹿な、イーオス以外のモンスターが砦に来るわけないだろうが。」

「そつすよねー、見間違えかな。」

「そうだな、初めての砦でのクエストに緊張してたんだろ、まあいいから俺の酒でも飲め今日は俺の奢りだ、ガハハ！」

「はーい、お言葉に甘えますー。先輩、ラオシャンロン討伐頑張ってください。」

「おうよ、このボルド様に任せとけガハハハハ！」

彼らは、その場の流れとお酒に酔ったことでそのモンスターの話などすっかり忘れてしまった。

こうして、彼らの噂により、彼の住み家にもう一つの入り口ができたかは誰もわからなかった。

第5話：住み家と嬉しい物（後書き）

ありがとうございました。

今回何処に住むかで、かなり迷ったので本当にあみだくじで決めました。

決まってから結構いけるんじゃないかと思いそのまま話に盛り込んでみました。

第6話：布団を探して

朝の光が差し込み、岩に反射して岩窟内が明るくなる。地面にそのまま雑魚寝をしたためにあまり寝心地は良くなかったが、今日から寝床を作れば最高の住処になるだろう。

とりあえず中に溜まっていたゴミを粗方外に放り出し、岩窟内を綺麗にする。疲れたので、水場を探しつつ休憩を挟む、案外近くに湧水が出ている場所を発見し飲んでも全く問題がなかった為にそこを水飲み場に決めた。

作業を始めてから2時間。

「（まあ、こんなもんだろ。…さて、必要なものは、寝床を作る木材・骨。後はー、俺的には布団となんかこう“モフツ”とした物が欲しいんだよねあゝ）」

何がいいかなあゝ、普通に考えると羽毛とかだな、そうするとイヤンクツクの『クツクファア』なんだけど繁殖期の雌にしか付いてない貴重品だったよなゝ、つかその前にイヤンクツクとか狩れないし……。小さい鳥は飛んでたけど、布団としては使えないから却下だな。やっぱ毛皮だよな、なんの毛皮がいいか、ブルファンゴとか毛が硬そうだな。

「（うゝん：寒そうな場所に住んでいるモンスターの方が毛皮が“モフツ”っとしてそうだよな。此处から結構遠いがフラヒヤ山脈の雪山まで行きますか。）」

この砦は旧火山地帯の近くにある。まあ地図で見たらちようど真ん中に位置するんだが、雪山は大陸の端っこで北に位置するためまあ遠いかと言えば遠いが真っ直ぐ飛んで行けるのが救いだ。古塔が

あったフォンロン大陸は大陸が違った為に海を渡って来た、それに比べたら全然近い。

今日中には帰って来れないだろうと覚悟を決めて出発した。

――――雪山――――

とりあえず山の頂上付近に降りたが、

……ガチガチガチガチガチ

「(さ……さあゝむゝいいゝ、誰かホットドリンクくれゝ。)」

寒さで体の震えが止まらない、どうしよう。まだこの大きさだと体温調節が上手いかわからない為に寒さや暑さに弱い。こんな状態で戦闘なんか無理だ、正直：雪山舐めてました。

「(マジでヤバいな、こんな状況で敵とか出てきたら死ぬな絶対。)」

「ギャー、ギャオギャオー」

「キゲーーーー！(ドスギアノスとギアノスの群れ出たー！最悪だー！)」

やって来て欲しくないタイミングで出るのはこの世の常でしょう

か。

震えてる場合じゃない。寒さで動かない翼を必死に動かし空中に浮かぶが、高さが足らない。ギアノスの跳び蹴りが足に当たりバランスを崩して下に落下した、雪のお陰でたいした衝撃は無かったがドスギアノスが待ってましたとばかりに口に氷液を溜めて吐き出すとして、俺は体を回転させ敵に尻尾を当てひるませる、その隙に飛び起き、ブレスを吐いた。ブレスは地面に直撃し大量の雪が舞って一瞬何も見えなくなる。

「(今だ!)」

今度こそと必死に翼を羽ばたかせ空へと逃げることに成功した。下でギアノス達が獲物が逃げたと大騒ぎしている。ムカつくのでもう一発ブレスを吐いてやった、一匹のギアノスに当たって崖から落ちていった。

ざまあみやがれ!

「(しかし危なかったな、このまま飛び続けることは不可能だし…仕方ないがもう少し下の方に下りるか。)」

高度を下げてもう少し下に降りることにした、徐々に下に下りて行くとハンターのテントを見つけた。

「(ヤバイ…ハンターに見つかったら厄介だぞ。)」

慎重に様子を窺うが全く人の気配がしない、よく見るとハンターが使い終わり放置していった物だった。一安心して好奇心からテントの中身を物色。

「(スゲー、これが回復アイテムか……うえ不味っ、…おおもさ

つきギアノスにくらってできた傷が無くなった。これはなんだ……ぐわっつ、こやし玉だ！こんなもん捨ててくなよ。こっちは何だ？鬼人葉か？……ぐわっ、辛っ……っあちいいー！なんだこれ、体が熱くなってきた。もしかしてこれ、ホットドリンクか？っっしやあー！ラッキー、後半ビンに残ってる……おっ満タンのも1本あるな、捨てていった奴ありがとーこれで寝床が作れます」

悪いことが起きたら良いこともある、これもこの世の常なんですね。とか馬鹿なことを考えつつ本格的に雪山の探索を始めた。

5分ぐらい飛んでいるとガウシカが2、3頭いるのを発見しそのままブレスで仕留めて舞い降りた。

「(……全然柔らかくない、なんかゴワゴワしてる)」

暖かいことは暖かいが肌触りが想像とは異なりがっかりした、見た目はトナカイに似ているからもう少しスベスベしていると思っていたために悲しかった。とりあえず1匹分の毛皮を持ってさっきのハンターが捨てたテントまで戻った、今日は此処に泊まる気まんまんだった。

まだホットドリンクの効果が残っているので探索を再開した、

「ぐおー」

モンスターの鳴き声が聞こえ警戒しながら近寄ると、俺が皮だけ剥いでそのまま放置していたガウシカの死体に白い毛皮の猿が2匹で取り合いをしていた。

「(しめたブランゴだ、毛並みも良いし最高の毛皮だ)」

気づかれないように慎重に近づき1匹目にブレスを近距離で当て仕留める、肉を取り合っていたもう1匹は一瞬硬直したがすぐに敵

が来たと身構え威嚇の咆哮をあげた。

ブランゴは雪の上を機敏な動きで俺の隙を狙ってくる、後ろ足に力を溜めたと思った瞬間、真っ直ぐに飛びかかって来た。鱗の堅い胸に飛びかかってきた為に歯が立たず傷は付かなかったが、かなりの衝撃に後ろに吹っ飛んだ。

「(つつつの猿ヤロー、舐めんな!)」

負けじと此方も真っ直ぐ飛びかかり喉元に噛みつく、そのまま上から抑え付け息の根を止めた。

ブランゴの毛皮も血が付かないように皮を剥いだ、ガウシカの時より血が口元にベツタリ付いたので、雪に顔をなすりつけて血を落とした。

ブランゴの毛皮は思った通りの肌触りに満足のいくもので、もう3匹狩り丁度ホットドリンクも切れたためにテントに戻った。

雪山の夜は尋常ではない寒さで、テントが無かったら死んでいたかもしれない。今日集めた毛皮に包まりながら眠りに着いた。

「(毛皮あったけ、でも結構獣クセーな……)」

第6話：布団を探して（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ブランゴの毛って暖かそうだなと思ってこうしました。ちなみにポポの毛も硬いそうです。

第7話：橙の羽根と赤い山

体の底から凍るような寒さに目が覚める、太陽は厚い雲に覆われ辺りは薄暗くより一層寒さがます。

「（駄目だ寒すぎる、……ホットドリンクは後一回分あるな）」

夜に長距離の飛行は危険だったために昨日はこの雪山に泊まったが、夜が明けた為もういる意味もない、ホットドリンクを腹に流し込みテントの外に出る、雪が強風で舞いビシビシと体を叩く。毛皮はテントの中にあつた袋に詰め両手で持つ、枚数があるために結構な量だが其処まで重くはない、飛ぶことに何の支障もなかった。

しばらく空の飛行を楽しんで雪山からだいぶ離れた頃お腹の虫が唸りをあげ、メシを寄越せと騒ぎ出す。休憩もかねて一度下に降りることにする。

此処はゲームでも登場していない場らしく見覚えが全くない。木々が生い茂り辺りを薄暗くし、より一層不気味さが増す。

「（……さっさとメシ食って移動しますか）」

生き物の気配がしない為、低い位置を飛びながら獲物を探す。

5分ほど飛ぶと小さな池に中型の草食竜で食用肉として有名なアプトノスの親子が水を飲んでいるところを見つけた、わざと見つかるように親子に近づき威嚇しながら親と子を別々に引き離す、それから子供に近づき、飛びかかる。喉元に噛みつきそのまま窒息死させる。しばらくすると子供は動かなくなった。親はというと怯えてそのまま森の中へと逃げてしまったようだ。少々薄情な気もするが、自然界では当たり前の出来事である。

「（ふっ、チヨロいもんよ）」

腹も膨れれば、こんな得体の知れない場所に何時までもいるのは気が引ける。

「（水を飲んでさっさと帰りますか、……あれなんだ？）」

橙色の綺麗な羽根が一枚地面にヒラリと落ちていたので拾い上げる、見たことないモンスターの羽根だ。

「（なんの羽根だ？イヤンクックはこんな感じの羽根じゃなかったはずだ。新種か？……俺、モンハンはポータブルの1と2ndしかやってないんだよな、そういえば学校の友達が新しいモンハンが出るって騒いでたな……。）」

羽根の大きさからみて結構大きい、俺の手の平ぐらいのサイズでイヤンクック位は余裕でありそうだ。

「（分からないというのは思ったより厄介だな、対策も何も出来ない）」

俺の知らないモンスターがこの場所に闊歩していると分かったのでさっさと引き上げることにする。

羽根は綺麗だったのと興味があったので持ち帰ることにした。

「（ふうー、やっと帰って来れた。……でも何だが騒がしいな）」

ここからわ大分距離があるがなんだか騒がしい、どうやら砦の方から聞こえてくる。

確かめるために岩陰に隠れながら低空を飛ぶ。砦の近くに来ると、どうやら人が集まっているようだ。

「（なんでこんなにも人がいるんだ……まさかラオシャンロンかシエンガオレンでもこの砦に来るのか？）」

周りをよく見ると砦へと続く高い崖に挟まれた道を木材で塞いだり、崖の上には大きな岩を設置してモンスターが下を通った時に落とす仕掛けを作っていた。

「（……は……はははは、引越してそうそうこれかよ、俺なんか憑いてるんじゃないか？……誰かお祓いしてくれー！）」

嫌だと思っていると日にちが経つのは早い、あっという間に5日が立つ、どうやら今度やってくるモンスターはあの超巨大な古龍ラオシャンロンらしい（作業している人間が話しているのを聞いた）、奴は周期的に大陸を横断しているらしく、翼が発達しなかった竜なので地面を歩くのだが、いかせん体が巨大すぎて歩くだけで周りにとってつもない被害がでる。

だから人間達は自分達の街に来ないように『砦』を造って進路を妨害するのだ。

そんな化け物がいつ来るか分からずに日々緊張しながら過ごす。

最初はラオシャンロンが来る前に逃げ、居なくなるまで他の場所でもやり過ごすという事も考えたが、ここに住むと決めた時からこういうことが起きると分かっていた。ここに来た、つまりいずれは来るという事で、ただ遅いか早いかそれだけだ。そう考えたら逃げるなんて馬鹿らしくなりこのままやり過ごすことに決めた。だが、ラオシャンロンが来ても隠れて見守るつもりだ！わざわざ死には行きたくない。

《来るなら来やがれー！俺は隠れるけどな》

これが今の心境だった。

腹が減っては戦もできぬ、最近砦に以上な数のイーオスがいる、死肉の好きなイーオスはラオシャンロンが砦に近づくと人間が必ず何人か死ぬと分かっているのだろう、または人間に倒されたラオシャンロンの肉でも狙っているのかもしれない、本当に奴らは賢い、見た目は肌が赤く毒々しい色合いに、角みtainな突起物は生えているが恐竜のラプトルそっくりだ。

…まあそれで今日のランチはイーオスだったのだが、あんまりイーオスの肉は好きではない（ランポスやギアノスにそっくりなくせに味は全然似てない）、しかし人間の数が多くて遠くに狩りに出かけられないので我慢だ。ランチを食べ終わり一息ついてると、微弱ながら連続的に地面が振動している、遠くのほうからドシーンと音が聞こえる。

「（ついにお出ましか）」

外を見ると2本足で立ちあがっているのだろう赤い特徴的な顔が見えた

「（でっデッケーー、なんだあれ小さい山ほどあるぞ。…もう少

し近くでみるか)」

好奇心に負け、ラオシャンロンの全体が見えるところまで移動する。

日々、自分の食べ物で捕まえその肉を喰らう、そのため多少残酷な殺し方でも命を奪うことに躊躇いなどない。前の世界では考えられないぐらい俺は生き物と闘いそして殺しているだろう

だが、目の前で繰り広げられている光景はそんな生易しいものはなかった。

ラオシャンロンの通った道には夥しいほどの血がこびり付き、人の死体が幾つも転がり闘いの凄まじさを物語る。

あるハンターは雄叫びをあげながらラオシャンロンに切りかかり、またあるハンターは弓を死に物狂いに射る、上から岩を落とす人も汗だくになりながらも必死に岩を運びタイミングを合わせて投下する。

ラオシャンロンの背には無数傷と矢が刺さり、その腹からは夥しい量の血を流れているが、それでも前に進む。

「ボルドー……避けるおおー」

ハンターが1人避けきれずにその大きな足の下敷きになる、あの巨体に踏まれ肉の塊と化した、もはや人であった形跡などない。次に待機していたのであろうハンターが入り、闘いが続く。

「(……これが、人と龍の闘い……)」

心のどこかで思っていたこと、今まで殺してきたモンスターはモンスターであって人でわない。しかし、今日の前で人が龍に闘いを

挑み死んでいく、ここでは当たり前のように起こる出来事。

「(……俺も人と闘い、生きるために殺すのか……)」

どこか遠い話のように思っていたことが、現実として襲う。

ハンターとの戦闘は避けられないだろう、自分でも自覚しているが俺はかなりの希少種だ、研究熱心な人間が放っておくはずがない。

「(……不謹慎だが、今日はこの闘いを見て案外幸運だったかもな、人と闘うことになった時の覚悟を持てた気がする……)」

ラオシャンロンとの攻防戦は砦から退かせた人間の勝利だったものの被害は大きく、何人もの死者とけが人が出た。それでも彼らは喜び合い笑っていた。そんな彼らを複雑そうな眼で見つめる俺に気づく者などいなかった。

第7話：橙の羽根と赤い山（後書き）

ありがとうございました。

『恐竜のラプトル』はあのジュラシックパークに出てくるのを、想像してもらえると嬉しいです。

第8話：頬の傷痕

一夜明けた砦はすっかりとまではいかないが本来の姿に戻りつつあった、潰されて死んだハンターの遺体は原形もない程酷いものだったので仲間が道具袋と防具の欠片を拾って持ち帰ったようだ。戦闘中に剥ぎとったのであろう鱗などを台車に乗せ、砦から帰って行った。

「(さて、俺も寢床を完成させますか。)」

まだ寢床の土台が完成していなく、材料も集まっていない。毛皮はだいぶ獣臭かったので温泉につけて水でよく揉み洗いして干しておいた。

「(土台の材料を取りに行くか)」

ここから西に半日ほど飛んで、アルコリス地方の森丘というところまで取りに行く事にした。ここから一番近くで探すとしたらラテイオ活火山(ハンターなどが『火山』と指す場所)なのだが、あそこは強いモンスターが多くまた火山地帯なのでものすごく暑い、前回の雪山見たいな事にはなりたくはないので却下だ。

「(俺、モンハンの中で『森丘』はかなり好きなフィールドでもあるから楽しみだな)」

空は澄み渡り上空から下の景色が良く見える、長い年月を経て横を流れる川によって削られてできた丘なので、壮大な丘陵地帯が続いている。奥は豊かな森林が広がり、鳥の囀りや木の葉の擦れる音が木々の間から聞こえる。

川の近くには多くのアプトノスが、青々と生い茂る草を食べたり水を飲んだりして過ごしている。

「（ぬー……森丘って良いな、なんか心が和むよ。……さてと、和みはここまでにして必要な物をさっさと集めますか）」

俺ものんびりと過ごしたいところだが、ここから砦まで半日掛かる。夜になった『森丘』は昼間の光景と一変する、出て来るモンスターは変わり肉食のモンスターが多くなる。そんなわけで、とりあえず森の方へ移動して材料探しを始める、適度な強度と大きさの骨や木材を探す。最初は全て骨で作った方がカッコイくない？とか考えていたが、骨のある場所は大型のモンスターが多い気がするので止めた。

でも諦めきれないのでちよつとは骨も集める。

木材も適度な大きさの木が見つからず、少々荒いがブレスで数本の若木をふっ飛ばし力業で叩き折った。

「（はあ……思ったより見つからないもんだな、結構簡単かなとか思ってたのに。後は骨か……、森丘だと飛竜種なんかが戦闘で弱った時に逃げ込む洞窟にあったよな……あれって『巢』になってたんだっただけ？）」

うろ覚えだったが、行って視れば分かるだろ。と、集めた木材を森の中にあつた大きな岩の直ぐ横に置き、行ってみることにした。

――洞窟内は思っていたより明るく下に餌となったモンスター
の骨が沢山散らばっているのがよく見えた。材料となりそうな骨
は見つかったが………やっぱり飛竜の巣でした、真新しい大きな
足跡を見つけました。てへ☆

「（：じゃねええー、俺のバカーなんでそんな大事なこと忘
れてたんだー、幸いこの巣の主は留守らしいから、もう素早く
拾ってささっと撤退しよう）」

下に散らばっている骨から数本選び拾い、洞窟から飛び出る。目
印にしていた大きな岩まで大急ぎで戻って来た。

「（ふうううー怖かったああ、そうだよ飛竜の巣だから骨があるん
だよ）」

材料が集まったが重くて一度に運べないので、仕方なく2回に分
けて運ぶことにする。

――とりあえず木材を家まで運んだが、すでに辺りは暗くなっ
ていたので明日に骨を取りに行くことにした――

早朝に家を出て昼前には森丘に到着する、改めて遠いなと思った。
昨日集めた骨をさっさと回収し、毛皮を運ぶ時にも重宝した袋の中

に突っ込んだ。

休憩も無しに長距離を飛んできて流石に疲れたので、休憩と水を飲む為に川岸まで移動することにした。

川岸には沢山のアプトノスが群れを成して固まっていた。俺の姿を見ても隠れもせず、ただムシヤムシヤと草を食べている、敵意がないと分かるのか逃げようと思わない。だからって、こんな近距離からだったらブレス吐いたら当たるじゃん、こいつら馬鹿か？だからあんなに簡単にハンターに捕まるんじゃないか？とか考えながら水を飲んでいると、急にアプトノス達が川を渡って向こう側の岸へと逃げていった、あれ〜とっていると俺の周りに大きな影ができた、バツッと上を見ると赤い外殻が目に入り、瞬時に横に転がり距離をとる。

「(…：…つつりりりりオレウスうう、アプトノスより俺のが全然馬鹿だあー、全く気付かなかったあー、とにかく逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃあああー)」

頬に縦の傷痕がある大きなリオレウスがゆっくりと空から舞い降りた。ワイバーン型の体型をしていて鋭い毒のある後ろ脚を持つ獰猛な大型肉食モンスターだ、ハンター達は彼らリオレウスの事を自由の空を飛びまわり高い戦闘力を持つことから『空の王者』と呼ぶ。突然現れた、空の王者に頭がパニックになり真白になる。リオレウスはゆっくりと俺を観察するように数十メートル先から鋭い眼差いで睨んでくる、俺が持っている袋に目が留まり、どうやら匂いで自分の巣から持ち出された物だと分かったのだろう、怒りの咆哮を上げる。体が本能的に震えだし、体から血の気が引いていく。

「(…とにかく慌てず確実に避けながら隙をみて逃げるしかない)」

凄まじい敵意の籠った視線と咆哮に体の震えが止まらない、

リオレウスは咆哮を止め、腹に力を溜め口からチロチロと火の粉が見えた、と思った瞬間、火竜の名にふさわしい巨大な火炎ブレスを吐き出した、俺も咄嗟にブレスを吐き応戦し相殺させることに成功するが、その事に怒ったリオレウスがそのまま真っ直ぐ俺の方に突進して来る。素早く翼を広げて空へと逃げる。

「(このまま逃げ切れるか……)」

リオレウスは突進の勢いあまってそのまま前に倒れこんで少しのタイムラグが生じる、素早く身を翻し空を飛んで逃げる。後ろから咆哮が聞こえ、ちらりと後ろを向くと物凄いスピードでリオレウスが空を飛び追いかけてくる。

「(だああああ、しつけないええー)」

後ろを気にしつつ必死に飛び続けるもすぐにリオレウスに追いつかれ、上空を捕られ鋭い爪のある後ろ足で上から攻撃してくる、それを翼を小さくたたみ体のを回転させ、急降下しながら避ける。リオレウスは続けて火炎ブレスを上空から3発放ち綺麗な弧を空に絵描きながら俺へと降ってくる、慌てて俺もブレスでを上空に3発放つが、1発が外れ相殺できなかった火炎ブレスが俺に向かって飛来する、体ひねるもドカッつと右の翼に当たった。ジュウつと嫌な音と肉の焼ける匂いがする、右の翼は黒くなり激痛がはしる。飛ぶことが不可能になり下の草原に落ちる、痛む翼をなんとか広げて地面に滑るように着地することに成功した。

「(つつつ…痛え、マジでヤバいな右の翼がもう動かねえ)」

本気で死ぬ

着地して起き上がろうとしている間にリオレウスが空から鋭い爪を剥き出しにして急襲してくる、避けることも出来ぬまま背中にもろに攻撃が入り、そのまま前方へと吹っ飛ばされる。背中の鱗が数枚剥がれ落ち血が流れ出てくる、あまりの痛みに声も出ず転がったまま動けない。ああもう俺死んだなと悟った瞬間、リオレウスが俺から目を離し横を向く、なんだと首を横へ向けると、なんともう1匹リオレウスがいた。

直ぐに2匹のリオレウスは睨み合い威嚇し合う、先に攻撃を仕掛けたのは今まで俺と闘っていたリオレウスで、もう一匹へと突っ込んで行った。

「（…今だ…）」

ボロボロの体を引きずりながらリオレウス達が争っている間に草原から森の方へと移動する、少しでもあの場から離れようと痛む体に鞭打ち進み続けるが5分も経たない内に段々と眼が霞んできて動けなくなった。

「（…ぐっ…背中から毒が入ったか…）」

体が熱くなり、体が震えだす。

朦朧とする意識の中茂みの方からガサガサと音が聞こえ、ゆっくりと首だけを動かして確認する。

「（……………終わった、俺ってとことん運ないんだな…………）」

ハンターらしき人間を確認して意識を飛ばした。

第8話：頬の傷痕（後書き）

最後までありがとうございます。

もしかしたら、外伝（というか別視点からの話？）を書くかもしれない
ませんが正直本当に分かりません、予定は未定です。

外伝／第1話：少女の心（前書き）

この作品外伝となっていますが、今までの主人公とは違った視点から書いた小説です。読まなくても話が分かるようにはしたいですが、読んだ方が確実に分かりやすいと思います。

外伝／第1話…少女の心

私の父はハンターでも有名な凄腕の大剣使いで、仲間達からの信頼も厚く頼りにされる様な存在だった。

だけど、父はギャンブルが大好きで、いつも母と喧嘩をしていた。母は私が5歳になった春に家を飛び出して帰って来なかった、噂では新しい男の人と暮らしているらしい。私はそんな父も母も大嫌いだった。

14歳になった私は早くあの家から離れたくて、がむしやりに勉強と鍛練をこなしハンターとしての資格を学んだ、そして西シユレイド王国から南へ数日下ったところに位置するココット村でハンター見習いとして暮らし始めてから1年が過ぎていた。

ある朝、いつものようにハンターズギルドへと向かっていると、村長に呼び止められた。

「おお、見習ハンターのエレナ君、丁度良かった。お主に頼みがあってな、ほれ『特産キノコ』の採集クエストに行ってくれんかな？」

小さな体にぼけつとした雰囲気からは想像もできないが、若い頃はココットの英雄と呼ばれるぐらい凄く強いハンターだったらしい。

「はい、いいですよ。『特産キノコ』ですね、場所は何処ですか？」
「おぉ、行ってくれるか、助かるわい。場所は森丘じゃよ、最近の報告でのおおきの強いリオレウスが住んどるらしいから気を付けてな」

私は直ぐに森丘へ向かう準備を始めた。

オトモアイルーとして雇ったルトーも一緒に来てもらうことにする。半年前にやっとネコバアから見習いハンターとして認めて貰い、一匹のアイルーと契約を交わした。それがオトモアイルーのルトーだった。

オトモアイルーとは私達ハンターにとって一緒にクエストに挑み、戦う大切な仲間なので、雇えた時はとても嬉しかった。ルトーもとても可愛くて、よくギューって抱きしめさせてもらってる。

準備を始めてすぐに家の呼び鈴が鳴った、急いで扉を開けるとこの町の住人ではないボロボロの鎧を纏ったハンターが立っていた。

「あなたは……エレナⅡアシュレイさんですか？」

「あっはい、そうですがどなた様ですか？」

「はい、俺はチャドⅡダンパー、ハンターです。……最近ギルドで噂になっていた、ラオシャンロン襲撃の件は知っていますよね？」

何日か前に村でも大騒ぎになった、ラオシャンロンが目覚めて移動を始めたってやつかな？見習である私に関係あるはずもなく、大変だなくと言うぐらいにしか思ってたが、

「はい、知っていますが何か？」

「……俺はその件でラオシャンロン撃退の為に砦へと向かいました、……あなたのお父さんと一緒に……、尊敬するあなたのお父さんは勇敢にもラオシャンロンと闘いましたが……」

「……死んだのですか？」

「……はい、俺はあなたにこれを渡したくてこのコcott村に立ち寄りしました。あなたのお父さんが使っていた、道具袋と鎧のかげらです。前にコcott村で暮らしている、あなたのことを聞きましたからどうしてもこれだけは親族の方に渡したくて」

あの父が死んだのか、……人としては最悪だったけどハンターとしては一流だったのに、

「そうですか、……わざわざありがとうございます。御座いました。お礼に上がって貰いたいところなのですが、生憎これから森丘でのクエストがあります……、連絡先を教えて貰えますか？後日伺います」

「いえ、俺が勝手にしたことなんで……ではまた」

そう言うと、彼は立ち去ってしまった、私も家の中へと戻り椅子に腰かけた。

心に大きな穴が空いた様になにも頭で考えることができなくなる、私は父が嫌いだった、でも死んだと聞いて心は悲みと絶望でぐちゃぐちゃになっていた。受け取った道具袋と鎧の欠片が腕の中で重みを増す、力を入れて抱きしめるように抱え込むが上からポタポタと雫が垂れ茶色い道具袋に濃い斑点がいくつもできた。

「はは、……大っ嫌いなのに涙が出るよ……」

父はもうこの世にいないということに実感がわかない、涙を拭い顔を二度叩く

「父とはもう1年も前に別れているのよ、しっかり自分!」

そう、この村に来る前から分かっていたこと、今さら父が死のうが関係ない。心に言い聞かせるように、私は村長から受けたクエストをもう一度確認しつつ準備を再開させた。

私はルトーが間違えて父の道具袋を持ち物の中に入れていることに気がつかないくらい頭が回っていなかった。

ふう、一人でのクエストは初めてなのでかなり緊張している。ルトーは張り切ってぴよんぴよん私の周りを飛び回っている。

「ご主人、頑張って『特産キノコ』探すニャー」

モンスターに気を配りつつ、採取ポイントを探す。森の方へと足を進めると3匹のモスを見つけた、このモスは外見は豚そのものでキノコが好物の小型モンスターである、ハンターが近づいてもキノコを探し続ける変わったモンスターだ。彼らのあとを追いつ、キノコが生えている場所を探した。

数時間すると持ち物はキノコでいっぱいになり、特産キノコも20個ほど集まり納品すればクエストクリアだ。

「そろそろ帰ろうかルトー、……………あれ何かな？ 何かが落ちてくるよ」

木々の間から何かが空から草原のある方角へと猛スピード落ちていくものが目に止まった、

「ちょっと行ってみよう」

「ご主人危険だニャー」

ルトーの制止も聞かずに私は何かが落ちていった方角へと歩きだした。

数十分歩くと、ズルズルと引きずるような音が聞こえゆつくりと茂みを掻き分けながら前に進むと、凶鑑でも見たこともないモンスターが血まみれで倒れていた。ルトーが危にゃいニャー、と止めるもその血だらけの姿に朝の話が頭をよぎる。

―― お父さんは勇敢にもラオシャンロンと闘いましたが……
……

頭を振り雑念を消す、足早にモンスターに近ずくと、横たわっていたモンスターはとても幼い顔立ちの幼竜だった。意識はなく、苦しそうに唸っている、背中からはおびただしい量の血が流れ、片翼は黒く焼け爛れている。

「うにゃー、この傷痕はリオレウスにやられたんだニャー、背中
の傷から奴の毒が入っているにゃ、翼は火炎ブレスでもくらったにゃ
ね、リオレウスに会うなんて運の無い奴にゃー」

ほつとこうにゃーと、言うルトーに

「駄目よ、この子は助けるわ」

「にゃんでニャー！」

「いいから、持ち物全部持って来て」

急いで持ち物を漁る、解毒薬は入れた記憶があるが、採集クエストだった為に回復薬を全く持って来ていない。中身を探していると、父の道具袋が紛れているのを見つけた、ルトーに確認すると間違え

て入れてしまったらしい、兎に角中を確認すると、とても高価な『秘薬』を見つけた。

「ギニャー！それはご主人の父上様の形見なんだにゃ、こんな雑種の幼竜なんか高価な『秘薬』を使っちゃダメニャー」

ニャーニャー騒ぐルトーを無視して、解毒薬と秘薬を使った。幼竜の傷はみるまに塞がり、黒くなっていた翼は綺麗な色へと戻った。昔に飼っていた犬のクーちゃんの色にそっくりでとても面白かった。

脱力したように倒れこんでいるルトーを抱き上げて近くの岩に腰かけた、木々の間からみえる空はとても青く澄み渡り、風が小さな雲を運んで行く。

帰ったら、父の道具袋と鎧の欠片は村の桜の木の下にでも埋めよう、父は桜の木が好きだったから。

晴れ渡る空と太陽が目沁みて涙が一雫頬を撫ぜた。

第9話：猫を抱く少女

頭ガンガンする、体が痛い…、もう一眠りしよう……………

「……ニャー、ニャー、ニャーニャーニャー」

「（つつつうるせー……）」

耳元でニャーニャー騒ぎまくっている存在をぶっ飛ばそうと体を起こすために力を入れるが、背中に痛みが走りそのまま力尽きたようにうつ伏せた。

痛みに頭がだんだん正気に戻っていく、

「（そうだ、俺りオレウスに殺されかけて…なんとか逃げ切れたけどその場で気を失ったんだ。……でも意識が飛ぶ瞬間、ハンターに見つかったはずだ）」

周りを見回す、どうやら捕まっていないようだ、体に縄らしきものは何も巻かれていない、ホッとしてもう一度周囲を確認して驚いた。

数メートル先に人間の少女が、猫を抱いてじっと俺のことを見ていた。

「……………」

驚愕のまま固まる俺、少女の腕の中にいた猫が暴れ出し、少女が猫を地面に下ろすとそのまま二足歩行で俺に近づき、腰に手を当ててふんぞり返りながらこう吐き捨てた。

「ご主人に感謝するといいニャー、僕のやさしーご主人がお前に『

解毒薬』と『秘薬』を恵んでやったんだニャ。僕はこんにゃ死にかけの見たこともない雑種の幼竜なんて、ほっとけばいいと言ったニャ！でも心やさしーご主人は形見でもある珍しくてとっても高価な『秘薬』まで使ってしまったんだニャー！」

ご主人が可哀想ニャーと地面にうつ伏せに倒れこみ大泣きしました。もう訳も分からず困惑したまま動けない、少女は困ったように俺を見て、目が合うと敵ではないと伝えたいのか優しく微笑んでいるのだが、俺が怖いのか足が震えているのが丸わかりだった。そんな少女の様子に余計頭がこんがらがる。

（何故助けたんだ……、着ている服と背中に背負っている武器からみても、あの少女がハンターであるのは間違いない）

怖がらせると分かっている、警戒した目で見てしまうことは仕方がないだろう。

大泣きしていた猫、いや今気が付いたがあれはアイルーという種族だ。直立した猫のような外見で人語を理解ししゃべる、知能が高く人間に雇われているアイルーもいるが、こいつもこの少女に雇われてているのだろうか？ まあ、そいつがいきなり俺の頭を叩きやがった。

「にゃんて恩知らずな幼竜だニャ、ご主人が傷の手当てをしなかったら今頃あの世へ旅立っているニャ」

言われたとおり翼の傷は完治しているし、背中の傷も殆ど塞がりかけている。あのままでいたら確実に死んでいたに違いない、だが助けた理由が分からない。

「（……何故助けた？助ける理由はなかったはずだ）」

「それはにゃ……聞いて来るニャ」

アイルーには龍語が通じるらしい、少女に通訳するために少女に飛びつき耳元でコソコソ喋り出す。

少女はおそろおそろ近づき、震える声で説明しだした。

「……あのですね…、ハンターズギルドでは、ギルドからの許可無しでの狩猟は硬く禁止されていて、私は今回は特産キノコの採取でこの森丘に来ているので、襲われたりしないかぎり君を狩猟する事はできません。……助けた理由は、たまたま荷物の中に『秘薬』があったから使いました。私はこの『秘薬』をさっさと捨ててしまいう予定でしたから……。……今さらだけど人間の言葉通じてる?」

不安そうに見つめるその目に嘘偽りは無さそうだが、やっぱり助けた『理由』が分からない。

「(通じている、……その『秘薬』は形見だと言ってなかったか?)」

「通じてるニャ、ご主人が使った『秘薬』が形見だってさっき僕が言ったから不思議がっているニャ」

アイルーを通じて会話をする。

「確かに、これは形見ではあるけど……私は父親が嫌いだから別にいいの、目の前で死にそうな命があって、それが助かるなら……。それに君の鱗の色が前に飼っていた犬に似ていたから、どうせ捨てるなら君に使おうと思ったの」

なんだか俺に敵意ないと分かるといきなり砕けた言葉になったな、そしてやっと本当の『理由』が聞けたが、その理由が飼っていた犬

と俺の鱗の色が同じだかららしい。

正直、は？と思ったのは俺だけか？そんな犬と一緒にされても嬉しくない。

俺の意識が戻って急に襲いかかってこられたらどうするつもりだったんだろう、俺は少女よりも倍近くの大きさがある、……どう見ても強そうなハンターではなさそうだし……。

……あれだな、この子は頭が可哀想な子なんだな……。

命の恩人に対して、ものすごく失礼なことを考えながらボーっと凝視している姿は、余程間抜けに見えたのだろう、アイルーに2発目の打撃をくらった。

「ぼーっとしてにやいで、お礼の一つくらい言ったらどうニャ！」

「叩いたら駄目だよルトー、この子はまだ傷が完治してないんだら……意識も戻ったしそろそろ帰ろうか」

アイルーを抱き上げ、荷物をまとめて帰り仕度を始める少女に俺はただ呆然と見守ることしかできなかった。アイルーのルトーは最後まで愚痴を零していたがな。

「じゃあ元気でね」

少女はそう言うと、森からでて行こうとする。俺はまだ名前も聞いていないことに気がついた、……少女の名前が知りたいと思った。

「グッ、グルル（待て、……な、名前を教えて欲しい）」

俺の声に気がついて少女が振り向いた。

「何かな？」

「ご主人の名前が知りたいんだニャー」

「え、本当に？わあ竜に名前を尋ねられるなんて初めて！」

竜を助ける方が珍しいと思うがな、

「私の名前はエレナ、エレナⅡアシュレイよ。君にも名前があるの？」

名前を聞かれて驚いた、そういえば自分には名前がなかったんだと、前世で名乗っていた名前はあがあるが、それは今の俺の名ではない。

「（……名前はない）」

「名前はないらしいニャ」

「そうなの、……じゃあ私が付けてもいい？」

そう言うと、少女は俺の名前を考え始めた。いや、別に付けることは構わないが、俺はまだ許可出してないぞ。

「……イスク、ってどうかしら？」

「流石はご主人、いい名前にゃ、こいつには勿体無いニャ」

イスク……、俺の名前

嬉しくて自然と尻尾が揺れる。エレナは空を見て辺りが暗くなり始めていることに気が付き慌てはじめた。

「そろそろ帰らないと、まずいニャ！」

「そうね、じゃあ本当にさよならね。元気でねイスク」

そう言うと、エレナは俺に背を向けた。俺も帰るために、治った翼を広げる。

「本当にありがとう、エレナ」

「え？」

エレナは驚いたように振り返ったが、俺は空へと飛び立って行った。

空には太陽と代わるように月が顔を出し、これからの夜を明るく照らす。

第9話：猫を抱く少女（後書き）

最後までありがとうございました。

外伝やっぱり載せることにしました、分かりやすくなると思います。
て。

外伝はかなり急いで書き上げた物なので少し不安があり、誤字など指摘していただけると嬉しいです。

そして今回一番時間がかかったのが、主人公 イスク の名前です。
これ、 ヒッタイトにおける気象の神イスクルから付けました。雨や雷嵐を司る「天界の王」だそうで、これにビビッと惹かれました。

これから頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

第10話..小さな命

母さんからの修行という名の死刑宣告を受けてから早3年、如何にかまだ生き延びている俺を誰でもいいから誉めて欲しい。

泥に塗れて身を隠し、獲物を捕らえて餌とする。何日もの間を水と草で空腹を紛らわし、やっと捕らえた獲物を別の大型モンスターに横取りされたあの絶望感。何度枕を涙でびしょ濡れにしたことか……。

しかし、俺は生き残っている。この厳しすぎる大自然の中を泥だらけになりながらも生き残っている。当初の俺の考えでは、一ヵ月もたずにあの世へ旅立っているはずだった、しかし、なんやかんやあって生き延びている俺にこれ以上何を望むというのか、望まれても俺は何もできないがな！

まあ、そんなこんなで3年の時が経てば体が大きくなるのは当然と言えば当然だった。体長は15メートルを超え、並の中型モンスターは俺を見ると逃げ出す様になっていた。

体が大きくなったメリットもかなりあるのだが、デメリットも生じるのは仕方のないことだろう、

と言うわけで、デメリット1。

体重の増加による、機敏な動きができない。体重の増加というよりも体が大きくなったせいで、前に転がるとか、横に転がるとかが難しくなったのだが、これが結構厄介なことで、突然の突進や攻撃に対処できなくなってしまったのだ。まあ、鱗もかなり硬くなっている為に防御力は半端なく上がっている、この為に致命傷になるような傷はなかなか無いのだがな。

デメリット2。

食事の量。体がでかくなれば食う量も増える、食糧確保のためにほぼ1日中駆けずり回り、餌を探す。餌を探し広大なフィールドを駆

け回っていれば、危険な大型モンスターやハンターに見つかる確率が高くなる。

デメリット3。

これが、今一番切羽詰まっている問題だろう、……アレだ。住み家が小さくなって狭い。いやもうギュウギュウなわけだ、早急な引っ越しが必要なのだが、住み慣れた場所を離れるのはなかなか寂しいもので、ぐだぐだと過ごしているうちにとうとう苦勞して作ったベットは大破してしまった。また岩窟内の天井も、俺が何度も頭をぶつけていくつもの亀裂が生じている。そのうちに崩れてしまうだろう。

どうしたものかと考えながら、最近ではよく食糧調達のために通っているテロス密林、ハンター達が一般的に『密林』と呼ぶ場所に來ていた。俺の住んでいる砦からは丁度東側に位置し、よく雨の降る地域で、気温も安定している為に木々が生い茂り、モンスターも多く生息している場所だった。気温が安定しているところでは森丘も同じなのだが、あのリオレウス襲撃事件以來ちょっとしたトラウマとなっているためにあれ以來一度も近づいていない。そういえば、あの面白い少女はどうしているだろうか……。

懐かしい思い出に耽っていると、遠くのほうから発砲音とともに凄まじい鳴き声と、何かが倒れる音が聞こえた。

「（あの発砲音は間違いなくハンターの遠距離用武器の音だ。まずいな、一度どこかに隠れてやり過ごすのが得策か……）」

できるだけ素早く、音が聞こえた場所から離れ、近くの洞窟へと身を隠した。

隠れた洞窟内でも戦闘があったらしく、真新しい戦いの跡が残されていた。爆弾でも使ったのだろう、洞窟内は火薬の臭いが充満し、生き物の焼ける臭いが鼻に付いた。

「（余程激しい戦闘だったんだな、洞窟内に血がこびり付いていやる。……この緑色の鱗はリオレイアの鱗か？　そうか、ハンター達はリオレイアと闘っているのか）」

リオレウスと同種の飛竜で、雌の火竜だ。背中や翼、尻尾に生えた棘には強い毒性がある。リオレウスを『空の王者』と呼ぶように、リオレイアにも『陸の女王』という異名を持つ。雖に餌を与えるために地上での戦闘に特化したゆえだろう。

1時間も経つと、密林は静けさを取り戻し、鳥や虫の羽音が響き渡る。そろそろ出るかな、と洞窟から顔を出し餌探しを再開しようとしたその時、洞窟の奥の方からザッザッと足音が響いて来た。え、なんだ、なんだ、とまごついている間に大きな荷物を両手に抱えるようにして歩いてくるハンターと目があった。

「（はい、見つかったー。隠れたの意味ねえー）」

ハンターもまさかこんな場所にモンスターがいるとは思ってもみなかったようで、固まっている。リオレイアと戦闘していたハンターなのだろうか、その身に纏っている防具は所々裂けたり、焦げ付いたりしている。幸い、ハンターは一人で行動していたらしく、仲間が来る気配はないが、このハンターが背負っている武器は大剣なので、最低でもさっき聞いた遠距離用武器を使うハンターがいるはずだ。

「（さっさと逃げるか、それともリオレイアとの戦闘で弱っているこいつを倒すか）」

少し思案していると、ハンターが抱えていた荷物を地面に落とし、

サツと腰から何かを取り出すと地面に叩きつけた。地面からはもくもくと緑色の煙が現れ、ハンターは何処かへと消えてしまった。

「（ふーっ、モドリ玉を使って逃げてくれたか。しかし、あのハンターは何を抱えていたんだ？）」

何かグシャッと嫌な音が聞こえた気がするのだが、近づいて確認をとる。洞窟内は暗くて見えにくい。

目を細めて落ちている物を確認すると、可哀想にもひび割れた卵が転がっていた。

「（ちっ、あのハンターめ、もう少し優しく扱えよな、割れてたらもう駄目じゃねえか……。そうか、コレの親を殺したから、巢から簡単に卵を持ち出して来れたのか）」

ハンター達もモンスターを狩ることを生業としている事ぐらい分かっている。だが、虫唾がはしる、親を殺して子まで奪うことない。しかし結局は親のいない子供は生き残れはしないのだ。矛盾しているだろう考えに、苛立ちながらも割れてしまった卵をせめて埋めてやろうと、近づいたその時、割れている卵が動きだした。

驚いた。思わず後ろにすっ転んだ。

カタカタと音を立てて、中から何かが出てきた。いや、何かって分かっちゃいるんだが、言葉にできないくらい驚いているってことだ。

キラキラと晴れ渡った空色の大きな瞳に、焦げ茶色の小さな体、赤ちゃんリオレイアがそこにいた。

「きゅー、きゅるるー」

あなたがママ？とでも言うような無垢な眼差しで見つめて来る。

「グアーー（なんでだーー、なんだその期待に満ちた眼差し、違う、違うからな）」

ぶんぶんつと首が引きちぎれんばかりに振りまくる。俺の声に驚いたのだろうか、目を潤ませ小刻みに震えだした。あつ、ヤバいっと思った時には遅かった。

「きゅーん、くうーくうー」

子犬のような可愛らしい声で泣きだした。

俺にどうしろと……。

「グルグル（あー、とにかく泣くな、な？ほーれ高い高い）」

優しく啜えて高く持ち上げる、きゅいきゅいと喜んでくれているようだ。10回程上下運動した首は適度な疲労感を帯びていた。しぶしながらも、やっと俺から離れたこの小さなリオレイアは、次はどんな遊びをしてくれるのか、期待に満ちた目で俺を見ている。

「（あー、どうすっかなあー……。この子の親は確実にハンターにやられただろうからなあ、確認した方がいいんだろうな。よし、リオレイアの巣まで行ってみるか）」

昔、俺が母さんの背中に乗って移動したように、この子にも俺の背中に乗ってもらい移動することにした。

「グルル（しっかり捕まってるよー、ってまだ言葉理解してなさそうだけどな）」

俺が、この子を啜えて背中に乗せる。不安定だったのか、口と翼で器用に俺のたてがみ部分にしがみついている、ゆっくりと空中に浮かびながら洞窟の奥へと進んだ。

奥に進むと、少し開けた場所に出た。リオレイアの巣だったのであろう、その場所には、ぐしゃぐしゃに潰された卵の残骸が残っていた。しかし、この場所でのハンターとリオレイアの戦闘形跡はなく、卵の残骸に蹴り飛ばした跡や、意味もない爆弾の焦げ跡が残っていた。ハンターが納品に必要な卵以外を面白半分で壊したのだろう。

この卵の中に入っていた小さな命もこの子みたいに、もうすぐこの世界に生まれてくるはずだったのに……。

俺はこの世界に生まれてから初めて、明確な殺意と怒りを覚えた。怒りでブルブルと震える俺の背中に乗っていた、この小さなリオレイアは不思議そうに周りの景色を眺めていた。

「（お前、少しの間一人で待ってられるか？）
「きゅー？」

分かっているのかいないのか、背中の上でもそもそと動いているこの子を、一人で待たせていても安全な場所を探す。すぐ近くにこの子がやっを入れるくらいの小さな横穴を見つけてその中に隠れてもらう。

「（いいか、ここでおとなしく待ってろよ）」

寂しそうに一声鳴いたが、穴からは出てこなかった。俺は洞窟を飛び出し、最初に発砲音を聞いた場所へと向かった。

第10話：小さな命（後書き）

ありがとうございます御座いました。

一気に3年経過しました。いつか、番外編みたいな感じで、この3年間にあった出来事なんかを書いたら面白そうかなと考えています。

第11話..切れた糸

何故俺はこんなにも怒りで頭がぐしゃぐしゃになっているのだろうか……。

自分でもこんなに早く飛べたことに驚きつつも、全速力で発砲音を聞いた場所に急いだ。近くまで来ると、大量の血と血なまぐさい臭いが辺りを充満していて鼻が効き難い。目を凝らしてよく見ると、数十メートル離れた位置に見るも無残な、陸の女王リオレイアの死体が横たわっていた。

「(……やっぱり、殺されていたか)」

リオレイアの傍から、白い煙がもくもくと上がり肉の焼ける良い匂いが漂って来た。静かに耳を凝らしてみると、三人の男ハンターが何やら話しているのが聞こえた。

「本当だって、見たこともない大型モンスターが居たんだって」

「嘘こけ、テメーがけっ躓いて飛竜の卵落したんだろ。どうすんだよ、俺とこいつで残りの卵潰しちまったぜ」

「まあ、いいじゃねーか。結構手間取ったが、このリオレイアは倒せたんだし、こいつの卵も潰してストレス発散にもなったしな、ハッハッハ！」

「まあーお前がそういうならいいがよ……。おしーことしたぜ、結構金になるんだよなあ、こいつの卵。まあ潰しても楽しいがな、ガッハッハ！」

俺の中で張り詰めていた糸が音を立てて切れた。

「グガアアアー！」

ありったけの力を込めたブレスをハンター達へと放った。真っ直ぐに飛ぶ青白い閃光とともに、木々をなぎ倒す音が辺りを包む。

「なっ！」

「避けるー！」

着弾とともに爆音が轟く、爆風とともに粉塵が中を舞う。

流石は陸の女王を倒しただけのことはある。3人のハンターは俺のブレスをギリギリのところまで避け、直ぐに武器を構えて戦闘態勢に入る。

「なんだよ、こいつは！銀色の鱗に……5本の角だど?!」

「分かんねーよ！」

「こいつだ、さっき俺が洞窟内で見たモンスターは」

最初に声を上げた髪の青いハンターが、人の背丈よりも長い太刀を構えながら俺に突っ込んでくる。尻尾で牽制を試みるも、するりと潜り抜けられ、太刀による一撃が背中へと入る。

――ガキンッ――

硬い鱗に阻まれた太刀は反動でハンターごと弾きとばした。

「ばっ馬鹿な……、リオレイアにも通用する俺の太刀が弾かれただ
と」

「俺がボウガンで援護する、二人で突っ込め！」

赤い髪のハンターが遠距離用の武器、ボウガンに弾を装填して俺の翼や顔を狙って撃ってくる、それと同時に二人のハンターが俺に

「そっそんな……ひっ、うああああ」

呆然としているハンターを見逃すはずもなく、俺の右手前足による猫パンチが当たり、ハンターは宙を舞いドサリと音を立てて地面に落ち動かなくなった。

「あっ、ああ……イア……ン。っうああああー」

洞窟内で遭遇したハンターは、悲鳴を上げながら仲間を見捨てて密林の奥へと逃げ去ってしまった。

後に残ったのは、戦いによって抉られた大地と静寂な森だけだった。

「（はっ……ははは……勝った、ハンターに勝てた……）」

今までハンターに何度か遭遇していたが、すべて戦闘はせずに逃げたり隠れたりしていた。だから本当は今初めてハンターと闘い、そして初めて俺は“人間を殺した”。

「（……なんだ、普通に戦えたし、殺せた）」

心のどこかで、人間と闘いたくない、殺したくないという感情が自然と今までハンターとの戦闘を避けていたのだろう、だが闘ってみてどうだっただろうか。

——モンスターとの戦闘と変わらない——

これが、今の素直な感想だった。

「（俺はいつの間にか心もモンスターとして生まれ変わっていたということか……）」

今さら前世に未練なんかなかった、ただ普通に人間を殺せたことで、改めて俺は人間ではないモンスターとしてこの世界に生きているんだと実感していた。

地上には太陽の光がほんの僅かにしか届かない密林で、背丈の小さい草は懸命に小さな白い花を咲かせていた。

――――

「(さて、早くチビすけの所に戻ってやんなきゃな)」

本当は、ここに横たわっているリオレイアのお墓を作ってやりたかったのだが、重すぎて運べないし、リオレイアが入れるぐらいの巨大な穴も掘れなかったので断念せざる負えなかった。

帰る途中にモスの群れを発見し、丁度いいので一匹を狩り、持ち帰ることにした。

「(おーい、戻って来たぞー)」

洞窟内に戻って声をかける。……出てこない、まさか何かに襲われて連れて行かれたか?!

慌てて洞窟内から飛び出して外を探そうと翼に力を込めた時、何やら不思議な音が後ろから聞こえた。そおーっと振り返って近づくと、どうやら、俺がチビすけに隠れていると言って押し込めた小さな横穴から聞こえてきているようだった。

「(はあああ、良かったあー……マジで焦ったあ)」

横穴の中で体を丸めて、クークーと音を立てて眠っている小さなリオレイアを見つけた。ちゃんと俺の言い付けを守って横穴でじっと待っていたのだろうが、いつの間にか眠ってしまったのだ。

気持ち良さそうに眠っていて起きる気配が全くない、俺も横になつてこの子が起きるのを待つことにした。

「(ふあゝあ、俺も眠くなってきた……)」

うつらうつらしているうちに、瞼がだんだんと重くなりいつの間にか、眠りの世界へと旅立っていった。

第11話：切れた糸（後書き）

新年明けましておめでとう御座います、この場を借りて挨拶させていただきます。

次回で、チビリオレイアの名前を決めたいと考えています。

今年もこんなペースですが、投稿したいと思いますので、よろしくお願ひします。

第12話：明るい心

「きゅいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！《バシーン》」

「グオオオオー（いつてええええー）」

俺の右目に何かが当たり、衝撃が痛みとなって瞼を通して眼球にダイレクトに伝わった。目をえぐり取られた様な痛みが、強制的に夢の世界から現実世界へと引きずり起こされた。

「（な：なんだ？）」

涙を右目からボロボロ零しながら下を向くと、チビリオレイアが俺の体にぴったりくっついて何かに警戒したような唸り声を上げている。どうやら、チビリオレイアが俺の右目にプロレスラーも真っ青な見事なタックルをかましてくれたらしい。

ああ？と機嫌の悪い雰囲気醸し出しながら、チビリオレイアが警戒して見ている方を向いてしまうことは許して欲しい。

じーっと見ることに数秒、硬い緑色の甲殻にバツタの様な長い脚、頭から尖った角が出ている虫が、びよーんと勢い良く地面から飛び上がった。びくうっと体を硬くするチビリオレイア。

「（あー、なんだカンタロスか。大丈夫だ心配すんなって）」

思えば、俺も生まれて初めてコイツを見た時は猛ダッシュで逃げたな、……結局潰して、体液まみれになった思い出が懐かしい。

チビリオレイアはギチギチと鳴いて近寄って来るカンタロスが気に入らないらしく、喉を鳴らして威嚇している。フンフンと鼻を2、3回鳴らして大きく息を吸ったと思ったら、口から真っ赤な火炎ブレスを吐きだした。まっ直ぐに飛んだ火炎ブレスはカンタロス

の硬い甲殻ごと丸焼きにしてしまった。

「（おっ…おおおー、スゴイなお前！もうブレス使えるのか、天才だな！）」

「きゅいきゅい！」

上手く当たったのが嬉しいのか、飛び跳ねて喜んでいる。

しかし、本当に凄いな。俺は何度も練習しても上手く出来なかったもんな、結局母さんにヒント貰ってやっとのことでできたしな。偉いな、とチビリオレイアを誉めながら、ふと思った。

この子に名前が無いので何て呼んだらいいか分からなくなる……俺が名前を決めるのか？

「（なあ、お前名前欲しいか？）」

「きゅう？きゅいきゅい！」

伝わったのか、首を縦に2度振り、翼を広げて喜んでいる。

「（そーかー、じゃあ少し考えるから、寝る前に取ってきたモスの肉でも食べて待っていてくれ）」

さっそく名前を考える始めるが、名前なんか付けたことも考えたこともない俺が、簡単に思い付くはずもなく、時間だけが無駄に過ぎて行く。

……正直かなり難しい、女の子だから余計に分からない。花の名前とかか？いや、駄目だ。俺、チューリップとかしか知らない。

うーんと頭を抱えながらうつ伏せに寝っ転がっていると、ついさつき経験した痛みが右目を襲った。

「グウアアアー（いつでええええー。：なんだ？お前は俺の右目に恨みでもあるのか？）」

「きゅいー、きゅいきゅい！」

何かを訴えるように、モスの死体をズイツと前に押し出している。
……あっそうか、デカくて食べられないんだな。いやー俺も最初、母さんにイヤンクックを丸ごと出された時は驚いたもんな！

悪い悪いと、俺はモスの肉を口で千切り渡そうとして固まった。

———— コレって、……口移しじゃね？

肉をくわえて固まる俺をつぶらな瞳で見つめてくる。

「（お：落ち着け、俺！変に意識するから駄目なんだ。そうだよ、コレは子供にご飯を食べやすいようにする作業の一つだ、只人と違って手が使えないから、仕方なく……くっ口移しに……）」

肉を地面に落としたことにも気がつかず、ぶつぶつと独り言を言う俺にイラついたのか、チビリオレイアは俺の顔面目掛けて火炎ブレスを放った。

「（あっちいー！……分かってるって、もう一度肉を千切るからそんなに睨むな）」

覚悟を決め、口を開けて待ち構えているチビリオレイアにゆっくり肉を近づける。バクバクと鳴る心臓の音が耳につく。20センチ、10センチと近づきついにパクっと音を立てて、チビリオレイアは俺の口から肉を受け取った。

今俺の前に鏡がなくてよかった。もし鏡があったら、真っ赤になり醜態を映し出す鏡を瞬時に叩き割っていただろう。

恥ずかしすぎる。

放心状態になっている俺に更に追い討ちをかけるかのごとく、チビリオレイアはもっと頂戴と口を開けて催促している。

「(……こうなったら最期までやってやるよ、口移し上等!)」

多少自棄になりつつも、そのまま何回か肉を渡した。

「(これで最後だな)」

大分お腹が膨れたのか食べる速さが遅くなった、最後の気力を振り絞り、小さく肉を千切って渡した。それを器用に受け取り、2、3回噛んで吞み込んだ。

やった、やり遂げたぞ。つと気を緩めたのがいけなかったのだろう、何を思ったのかチビリオレイアは俺の口に付いていた肉の欠片をペロンと舐めとった。

「(なっ……なななにしてるんだ)」

「きゅう? きゅい」

顔に熱が集中する。何かいけないことした? とでも言いたげに首を傾げているチビリオレイア。

そうゆう問題じゃないんだよ。

予定外に時間をくってしまったが、再度名前を考え始める。

んー、思いつかない、大体俺が名前を考えるとか無理なんだよな、知ってる名前はアニメとかゲームとか……そういえばなんかのゲームで女神の名前があったな。確か、『アーネ』だったか? 意味は明るいだったかな。

「（よし、決めた。お前の名前はアーネだ）」

「（ア：ネ？アーネ、アーネ！）」

「（おおーそうだ、アーネだ。俺の名前も言えるか？イスクだ、イスク兄さんだな）」

「（イスク：イスクにいい！）」

「（そうそう凄いな、偉いぞ）」

自分の名前と俺の名前を言いながら飛び跳ねてる。めっちゃ可愛い。これがいわゆる萌ってやつだな。

このままのんびりと過ごすのもいいのだが、俺はアーネに話して確認を取らなくてはいけないことがある。

「（アーネ、分からないかもしれないが大事な話があるんだ。お前の母さんは分けあってお前の傍には居てやれないんだ。だから、俺と一緒に来るか？）」

アーネは俺の真剣な言葉と眼差しに一瞬戸惑って固まったが、すぐにニコッと笑い、

「きゅい！」

と大きく頷いた。

「（そっか、じゃあ一緒に行くか！）」

とりあえず、ここから出ることにした。

俺は腹が減っている。余ったモスの肉は一口で食べ終わってしまった。とてもじゃないが足りない。そして何より、寝てしまったことで今が昼なのか、夜なのか分からない。アーネを呼んで、移動の

ためにまた背中に乗ってもらおう。

洞窟の外に出ると、空がオレンジ色に染まり太陽が沈みかけていた。アーネは初めて見る夕焼け空に感動して背中の上ではしゃいでいる。

「（もう夕方か、ここから砦まで結構かかるし、お腹空いてるけどアーネもいるからさっさと帰るか）」

「（かえるか）」

女の子が帰るかなんて言うんじゃない。そんなことを思いつつ砦に向けて出発した。

……そういえば、俺の家は狭すぎてアーネと二人で入れないんだ。俺は外で寝るのか。

第12話：明るい心（後書き）

ありがとうございました。

いやー、名前を考えるのに時間がかかってしまいました。『アネ』にしようか『アーネ』にしようか、かなり迷いましたが、結局『アーネ』にしました。

意味は 愛と豊穡・多産の女神だそうです。また『アネ』という名前には「明るい」という意味があるそうです。ので、そちらの意味も頂きました。

皆さん、最近寒いのでお体にお気を付けください。自分は気をつけていたにもかかわらず、現在咳が止まりません。では、また次回にどうぞよろしく願います。

第13話..不憫な猫

唐突だが、キャンプファイヤーを体験したことがあるだろうか。薪を組んで火をつけ、皆でその周りを囲むように、踊ったり歌ったりする謎の儀式だ。パチパチと火の粉が飛び、皆の顔を明るく照らし、しばし異様な空間へと誘われる。

フォークダンスで、気になる子と手がつなげるかも、というドキドキした感覚。あいつとは踊りたくないという苦い思い。どれも懐かしい思い出として自身の記憶に深く刻まれるイベントの一つだ。

目の前の光景からそんな記憶が思い出されたのは、一種の現実逃避なのだろう。ゴウゴウと音を立てて燃え上がる自分の家だった岩窟を目にして、平常心を保てるほど俺の心は強くなかった。俺にしがみついているアーネが申し訳なさそうに鳴いていた。

「(……まあ、気にすんな。どうせ引越す予定だったんだ。)」

「(ごめん…なさ…い)」

「(ああー、泣くなつて。大丈夫だって)」

とうとう泣きだしてしまった。なぜこんな事になってしまったのか、それは至極単純で不幸な事故であった。

昨日の夜アーネを岩窟内にあるベットで寝かせてから俺も寝るために外に出た。しかし外で寝ているせいなのか、なかなか寝付けずに霧がかっている夜空を眺め、ぼーっと数時間過ごしていると突然、岩窟内からボンッという破裂音が聞こえた。慌てて中に入ると、アーネが寝ているベットのすぐ近くに掛けてあった毛皮が、パチパチと白い煙を上げながら燃えていた。咄然としながら、アーネに駆け寄ると可愛い寝顔で口から朱色の炎がチロチロと動いている。とりあえずアーネを抱えて外に飛び出した。

これで、わかっていただけただろう。アーネが寝ぼけて火炎ブレ

スを放ってしまったのだ。ちいさな子供がお漏らししてしまったよ
うなものだ、ただ運悪く毛皮に引火し勢いよく燃えあがってしまった
のだ。

泣き続けるアーネをなんとか宥めることに成功し、夜明けまで大
分時間があるので俺の翼を布団代りにアーネと二人で包まって眠り
についた。

朝日が昇り、周りが明るくなってくると、真っ黒になった岩窟が
良く見えた、どちらかといえば白っぽかった岩が真っ黒になってい
て、それだけで火事の酷さを物語っている。

岩窟のすぐ近くで寝ていたものだから、舞い上がった煙や煤で二
人とも真っ黒になっていた。流石に汚いと随分御無沙汰となってい
たが、温泉にまで行くことにした。

温泉の近くまで飛んでくると、周りは硫黄独特の匂いが充満して
いる。アーネはこの硫黄独特の匂いが好きではないらしく、俺の背
中でバタバタと抗議を挙げている。

「(温泉の魅力はスゴイぞー、一度味わうとやみつくてな)」

「(臭い、暑い!)」

「(まあまあ、もう着くから)」

埃を立てないように着地をする、湯からは白い湯気が立ち上り、
なんとも気持ちよさそうだ。

「(湯加減は……ん、丁度いい、さっそく入るぞ!)」

前足からザブンっと入る。くはくたまりませんなあ。

じーっと見ているアーネを尻目にのんびりと寛ぐ、……そんなに
気になるなら入ってみればいいのに。

「(ほらー、さっさと入らないとずっと汚いままだぞ)」

「(やだー、入らないー)」

「(汚いまんまだと背中に乗せてやらないぞー)」

「(……………」

そんな可愛い眼差しで見つめても駄目だ、ここは……ゆっ、譲らん。

熾烈な攻防戦はなんとか俺が勝利を収め、アーネはしぶしぶとゆっくり温泉に浸かった。

「(……気持ちい)」

「(だろー、だから言ったんだ)」

気に入ったのかバシャバシャと遊び始めた。まったく、湯の中で動くとのぼせるんだぞ。

……言わんこっちゃない、茹で上がる寸前まで遊んでいたアーネを引き上げて翼で風を送る。気持ち良さそうに喉をならしながら寛いでいる、……汚れが落ちたせいなのかアーネの体の色が全体的に薄くなってる気がするんだが、まあ俺の気のせいだろう。

「(さて、さっさと帰るかと言いたいところだが、帰る場所がない。何処行こうか?)」

そうなんだ、何処に引っ越そうか。このまま砦で暮らしたいが餌が無くて大変だから却下、気温が安定していないとアーネが厳しいから火山や雪山も駄目だな……そうすると、後は密林、森丘、沼地か?……沼地は衛生的に汚いから却下だな。

そうになると、密林か森丘になるのか……だが今密林に引っ越すのはアーネにとっていいこととは言えないな、

「（よし、決めた。アーネ、森丘まで飛ぶから準備が出来たら背中に乗ってくれ）」

すぐに駆けつけて俺の背中によじ登ったアーネがしつかり捕まっているのを確認し、長く暮らしていた砦に心の中で別れを告げて飛び立った。

――森丘上空――

連なる山脈から解けてた水が、一滴一滴集まり大きな流れとなって大河になり、豊かな川は周りの生命に活力を与える。

3年前と変わらず雄大な光景に暫し見とれ、ゆっくりと地上に降り立った。

「（よし、着いた）」

背中から勢いよく飛び降りたアーネは、草の上をゴロゴロと転がり、それに驚いて飛び出した虫を追いかけて回して遊び始めた。

「（こらー、虫を苛めるんじゃない、可哀想だろ）」

「（んー、わかった）」

なんていい子なんだ。素直なアーネに感涙していると、アーネから狼が唸るような音が聞こえてきた。

「(そ、そうだな、とりあえずメシにするか)」

「(ごはんー!)」

いい感じの木陰を見つけ、アーネにはそこで大人しく待っていてもらうことにした。

少し飛ぶと川辺に沢山のアプトノスを発見した。狙いを定めるために上空から群れを観察していると、リーダーらしき一匹が俺に気が付き一目散に茂みの方へと駆け出し、続いて他のアプトノス達も茂みへと駆け出し始めた。まずい、と急いで追いかけようとした時、片足を引きずって群れから遅れ、離れている一匹のアプトノスを見つけた。ラッキーっとコイツに上空から体当たりをかまし、簡単に捕まえる事に成功した。

「(ふー、なんとか捕まえられたな。さて、早くアーネの所に戻りますか)」

鼻歌を口ずさみながら、大きな獲物を抱えるようにして持ち帰った。

木陰が視界に入ってくるまで近くになると、アーネが待ちわびたように飛び出して俺を出迎えてくれた。可愛すぎる、自然と顔の筋肉が緩んだ。

アプトノスを地面に下ろし、疲れた肩をほぐすように回す。アーネを見ると大きな目をさらに大きく見開きながらアプトノスを観察している。アーネの背中に乗っていたアイルーも「これは凄いですね」と言っただけでアーネと観察を始めた。俺も肉を捌くためにアプトノスに近づいてピタリと止まった。

……………なんか、すっっっごく違和感があったな。奇妙な感

覚を振り払うように頭を数回振り、もう一度アーネの方へと視線を向けた。

「（おまえは誰だー！ー！ー！）」

「（ぎにゃにゃー、……すみませんが、そんなに大きな声を出さないでください）」

「（イスクにい、うるさい）」

器用に両手を耳に当てて塞いでいるアイルーを凝視する。落ち着いて状況を確認しようと必死に頭を動かし、このアイルーを観察する、そして奇妙なことに気が付いた。

「（……おまえは何だ、何故アーネと一緒にいる）」

多少の殺気を籠めて、アイルーに問いかけた。俺がいない間に何があったのか、そして何より何故アイルーが防具を身に纏っているのか、得体のしれないコイツは危険だと判断した俺は間違っていないだろう。

雰囲気の変わった俺に怯えたのか、アーネの後ろへと隠れた。アーネも俺が怖いのか泣きそうな目をしている。舌打ちをして、殺気を納める。

「（もう一度聞く、おまえは誰だ。見たところアイルーだな、何故防具を着ている）」

「（はっ…はい、僕は『オトモアイルー』をしていました、ピンズと言います。一匹のランゴスタに追いかけて回されていたところをアーネさんに助けていただきました）」

脅えながらもピンズとやらは、アイルーには珍しくしっかりとした口調で話し始めた。なるほど、経緯は分かった。しかしランゴス

タに追いかけて回されるって不憫な奴だな、アーネもよく助けたものだ。ランゴスタって言えばモンスターハンターの中ではお邪魔虫的な存在だが、現実だとかなりでかい。人間ぐらゐある蜂だ、そして尻の先に毒針を持っていて刺されると痺れて動けなり、その間に群れで襲いかかり捕食される。ほんとにどうやって倒したんだアーネ。そんなことより、聞きなれない単語が出てきたな、

「(オトモアイルー、なんだそれは)」

「(ハンターと一緒にクエストに参加し、サポートなどを務めるアイルーのことです)」

「(おまえハンターと一緒にここに来たのか?!)」

締まっていた殺気を再び溢れさせ、ピンズに詰め寄る。

「(ちっ：違います！僕はもうオトモアイルーではありません！もう、帰るとこなんかないんです……)」

俯いて小刻みに震えながら耐えているコイツが嘘を付いているようにも、騙しているようにもとても見えず。アーネも心配そうにピンズに話かけている。なんだか俺がいじめてるみたいだ……。

「(分かった、信じるよ。経緯は聞かないが、おまえこれからどうするんだ？ランゴスタにも勝てないようじゃ、ここら辺は危険だぞ？」

「(あの…それは、その……)」

「(決まってるじゃないなら一緒に来るか？なんだかアーネはおまえのことを気にいってるみたいだしな)」

「(いいんですか?!)」

「(嫌ならいいがな、アーネはいいんだろ?)」

「(うん！ピンズ一緒に行きー)」

アーネに確認を取るまでもなく、喜んで答えた。

「(はい！よろしく願います)」

深々とお辞儀をするピンズに、頭上げろよ、と声を掛ける。頭が地面に着くんじゃないかというぐらい下げているピンズに、笑顔で飛びついたアーネを止められなかった俺を許してくれ。

その後、アーネが鮮やかにランゴスタを仕留めた話をしながら、捕ってきたアプトノスを美味しく頂きました。

第13話：不憫な猫（後書き）

ありがとうございました。

今回登場したピンズ君の名前の由来ですが、麻雀のピンズから採りました。発音は最初のピの字が上がる感じで、麻雀とは少し違います。が、まあどっちでもいいかというのが本音です（笑）

補足

本編にも書いたと思いますが、主人公はモンスターハンターポータブルと2ndしかやったことありません。2ndGから登場したオトモアイルーは知りませんでした。これから主人公の知らないモンスターや言葉も登場するでしょう。

次回はハンター側の話になるかなと考えています。ので、どうぞよろしく願います。

外伝／第2話…探索隊

ハンターというものは人数はもちろん、人気も非常に高い職業の一つである。皆が皆、飛竜と区別されるモンスターに挑むことが出来るわけではないが、その目標に向かって、日々鍛錬を怠らない。

しかし、モンスターに生身の人間が勝負を挑むのだから、毎年死者数など数えられない程に出る。有名なハンターもちょっとしたミス一つであの世に逝ってしまう、そんな職業だからこそ、尊敬の眼差しで見られ、大物の飛竜種を倒した者は英雄として長く語り継がれる。だからこそ皆こぞってハンターという危険な職業に志願するのである。

そんなハンターの集い場、もといハンターズギルドは何時も陽気な場所だとは思えない程慌ただしく、また異様な空気が辺りを漂っていた。

「本当に未知のモンスターと遭遇したのか!？」

「そうです、リオレイアをも倒した太刀や大剣が全く刃が立たない銀色の鱗、その強靱な鱗であると分かった上でガンナーのみを狙う賢い知恵。……こんなモンスター見たことがない!」

リオレイア討伐という、上級者クエストを行うようなハンター3人が、いくらリオレイア討伐後でアイテムが少なかったとしても、2人死亡、1人がなんとか逃げ帰った、しかも現れたのがハンターズギルドも未確認のモンスターであるとは異常な事態であった。

「確かにお主達が受注したクエストでは、我々ギルドが下調べした結果、密林にリオレイア以外的大型モンスターはいないというのが、調査結果だったのだが……。」

「そんな事より! 未確認のモンスターがああ辺りにいるかも知れな

いのですよ！銀色の鱗なんて……もっ、もしかして……伝説の古龍『風翔竜・クシャルダオラ』じゃないでしょうか」

「馬鹿な、古龍なぞ伝説にすぎん」

「しかし、最近に雪山では古龍の脱皮した後ではないかと思われる鱗などが見つかったのですよ！」

何時間にも渡り、ギルドマスターを中心に収拾の付かない話し合いが繰り広げられている。イライラとした気持ちで見ているのは私だけじゃなさそうね。

「だいたい、彼の話にも信憑性が欠けております。未知のモンスターなど……彼のでっち上げでは？」

「彼ら2人の死はどう説明する。彼らはリオレイア討伐クエストは今回で5回目だ、失敗するとは思えん」

「そうです！本当に見たんだ！全てを見通すかのような翡翠の眼、俺が嘘を付いてなんの得がある！」

机を強打した音が響く、ザワザワと各々で話し始める。

「とにかく、一度密林に探索隊を派遣した方が良さそうじゃ」

マスターの意見に、肯定するように首を上下するが、では誰が行くのかという問題が出てくる。そして、古龍かもしれないという得体のしれないモンスターがいる所などには誰も行きたくはないと、またザワザワと騒ぎ始める。でも、私はワクワクしていた、なんて言っただって古龍種が見れるかもしれないのだから、

「静まれー、派遣する奴は決まっておる。あ奴等に行ってもらおう。」

「奴等ですか？ああ、彼らなら心配はないとは思いますが、なんせ古龍ですからね、引き受けてくれるでしょうか？」

「心配ないわい、むしろ古龍と聞いて喜ぶかもしれん」

とりあえず、派遣する人が決まり皆安堵したように一息つこうとしたが、私は駄目もとで手を上げてこう発言した。

「あの、私もその探索隊に参加させて貰えないでしょうか」

私はそう言って内心ドキドキしながら、マスターの目をじっと見つめた。

「無茶ですよ、いくらエレナ君が新人の中でも抜きん出て、戦闘センスが良いと言っても、まだやっと飛竜種の中で一番小さいイヤンクック討伐クエストが受注できるようになったばかりなんですよ」

私の師である、優しい顔つきが特徴のコム先生が焦ったように椅子から立ち上がった。ここで引き下がる訳にはいけない、

「無理なことは重々承知です、でも私はその未知なるモンスターに興味があるんです。どうかお願いします」

必死に頭を下げる、マスターが何かを悟ったかのように、一つ頷くと、

「分かった、エレナも言ってきたさい。丁度討伐に向かう連中も彼女の父君と知り合いだったから問題ないじゃろうて、しかしくれぐれも気を付けるんじゃないよ」

「ありがとうございますマスター！」

嬉しくてついその場でガッツポーズをとりそうになるのをなんとか抑えて、席に着いた。コム先生は不満があるらしく独り言を呟い

ている。

要約探索隊の派遣が決まり、皆席を立てて退出しだした。私も席を立て、早速準備に取り掛かろうと腰を上げようとしたが、先生に声を掛けられた。

「エレナ君、君は何を考えているのかね。ハンターとしてはまだまだ新人の君が、未知のモンスター探索隊に加わるなんて、ましてや古龍種かもしれないのに……古龍種は存在自体が伝説だ、君も知っているだろう？その脅威の強さを」

心配からか一方的に捲くし立てられて私は戸惑ったように先生を見た。

「先生、分かっています。父は古龍種のラオシャンロンの討伐で命を落としていますし、古龍種の恐ろしさはハンターなら誰でも知っています。ですが、どうしても一度古龍種をこの目で見てみたいんです」

好奇心に目キラキラさせていただろう、何かなんでも譲れませんと先生をじっと見つめる。私は好奇心が人一倍強く、こうと決めたら曲げない頑固な一面を持つことを自覚している、そんな私をよく知ってくれている先生は、諦めたように深いため息を吐くと、

「……何を言っても無駄ですね。いいですか、周りのハンター達に迷惑にならないように行動するのですよ。モンスターが出てもし出してしゃばらずに、自分のできることをよく考えて行動してください」

「はい！わかりました。ありがとうございます！」

嬉しくて笑みが零れた、隠すようにその場から急いで立ち去った。

「……まったく、あの行動力は父親譲りですね、困ったところが似てしまったようですね」

そんなことを先生が言っていたなんて全然気がつかなかった。

――――――――――

家に着くと二匹のアイルーが出迎えてくれた。

「「お帰りなさいませニャー」」

ルトーと、新しくネコバアから雇った、キッチンアイルーのバナラだ。キッチンアイルーとはその名の通り、料理を作ってくれるアイルーのことだ。さまざまな食材から料理を作ってくれる頼もしい仲間だ。

「今日はスタミナ満点のポポ肉とふたごキノコのソテーですニャー」
「わぁー美味しそうだね、つとそうだ！ルトーにバナラ、最近噂になってる密林謎のモンスター知ってるよね？私その探索隊に参加することになったから」

「へー凄いにゃー、………ってご主人正気かにな！？古龍種かもしれないって言うあれかにな！？ダメだニャー！こないだもイヤンクツクに突き殺されそうになったばかりにゃのに！」

「あれは、ちょっとつまずいただけよ。それに、私どうしても古龍

種が見てみたいの、ハンターなら一度は見てみたいものよ!」

ダメニャー——!!とか叫んでいるルトーの横から、ニコニコとした笑顔でバナラが新しい料理をテーブルの上に並べてくれた。

「ふふ、ルトー君はそんな高位クエストには付いていけないからご主人さんの事が心配なんですのニャね。でもご主人さん、出発はいつなんですか?」

「んー、今日かな、なんせ早急に確認しなきゃいけないからね」

「ギニャニャ!急いで支度しないとだニャー、でもホントにいくんですかにゃ?……そうですよ、一度言ったら聞かないのがご主人ですもんね、じゃあささと支度するにゃ」

ルトーがどたばたと支度をするのを眺めながら食事に集中してしまった。それほどにバナラの料理は美味しかった。

「じゃあ、行ってくるね。留守番よろしくね」

「お気をつけて下さいにゃ」

「気をつけて下さいニャー、見つかったらすぐに逃げて下さいねご主人……」

白いハンカチで涙を拭いながら手を振っているルトーをなだめながらバナラも手を振って見送ってくれた。

外伝／第2話：探索隊（後書き）

ありがとうございます御座いました。

皆様、お久しぶりです。……えー、約2カ月ぶりの更新になりました、……大分お待たせしまして、申し訳ありませんでしたーm（――）m
最近パソコンに触れている時間が少なくて、本当に申し訳ないです。
もう少し更新のスピードを上げたいと持っていますので、こんな作者ですが、どうかよろしくお願いいたします。

今回のお話は、3年後のエレナがメインです。彼女も良い意味で成長した部分があるのですが、基本的には好奇心旺盛な女の子です。
外伝はエレナ視点からハンター側のお話を書けたらいいなと考えています。が、これからどうなるかは、まだ未定です。（笑）

第14話..消えた光（前書き）

こんにちは、こんばんは、またはおはようございます。どうも作者のユーマです、今日はこの場をお借りして、皆さまに感謝の言葉を述べさせていただきます。

と言いますのも、なんとPVの累計が20万アクセスを超え、現在218,642という大変な数を叩きだし、私もパニックに陥っているところであります。

この作品は皆さまの応援があつてなりたっているんだな、と深く心に刻み込み此処にお礼申しあげたいと思います。

本当にありがとうございます。これから精進していききたいと思えますので、どうぞよろしくお願い致します。

長くなりましたので、後は後書きに書きたいと思います。では失礼いたします。

第14話..消えた光

「なるほど、イスクさん達は中央の砦からこの森丘に引っ越して来たんですね」

むしゃむしゃと今朝捕ってきたアプトノスを頬張りながら、ピンズと情報交換をする。どうやら、彼は数日前にこの森丘やって来たようだ、何故彼一人でここに来たのかは教えてくれないが、まあそのうち打ち明けてくれるだろう。そう彼を信じることにした、彼のあのなんとも言い難い表情が俺の心のどこかに響いたのだ。

「（ああ、だから安心して過ごせる場所なんかを探して、寝場所でも作ろうかと思ってるんだが……、そうかまだあのリオレウスが住み着いているのか……）」

三年前、この森丘で殺されかけた忘れることのできない嫌な記憶が蘇ってくる。なんでも、ここ三年間幾度となくハンターや縄張り争いに勝ち勝ち、主としての地位に君臨し続けている、あの頬に傷のあるリオレウスだ。

「そうなんです、スゴ腕のハンターも敵わずに逃げかえったと聞いています。ですから、この三年間ずっと森丘はリオレウスに気をつけながら、クエストをこなすという厳しいものになっていました」

ピンズは余った肉を器用に薄く切り、日のあたる岩の上に並べて保存用の肉を作っている。しかし、まだリオレウスがこの森丘に住み着いているとなると、この場所も危険かもしれないが、

「（まあ、見つかったら見つかった時だな）」

と気楽に考える俺にピンズは戸惑ったように、

「ハハハ、そうですね。まあこんなに広い土地ですからそうそう出会ったりしないでしょうね」

と苦笑いで返してきた。なんだか変なフラグを立てたような気がしないでもないが、とりあえずは、今日から住み家として使えそうな場所を探すことから始めようか。できれば、水場からそう離れていない所が好ましいが、贅沢はいけないな。

「（なあ、ここらで比較的安全な泉とか池とかってないか？なんだかお腹いっぱいになったら喉渴いてきたし、水飲み場の場所を確認したいんだよな）」

「そうですね、じゃあ僕のお気に入りの泉へ案内します。まあ、たまに中型のモンスターが現れたりしますが、イスクさんなら問題ないと思います」

ピンズに案内を頼んで、泉へ向かうことに決めた。

ずいぶんと大人しくし待っていてくれたアーネに声を掛けようとして愕然とした。ついさっきまで一緒に朝食を食べていたのに、アーネの姿が見当たらないのだ。……いや焦るな、たぶんそこら辺で遊んでいるんだ。

心を落ち着かせるために岩に凭れかけるようにしていた体を起こし、遠くまでを見渡してみた。……いない。

「（……ぴぴぴ、ツピンズ！アーネが消えた！）」

「え？……本当です！なんでですか！？さっきまでそのお花を不思議そうに眺めていたのに！」

「グオオオオオオオー！(アアーネー！どこだー！)」

もう、腹の底からあらん限りの力で叫んだ。ピヨピヨと驚いて飛び去る鳥も気にはいられない、アーネが本当に出てこないのだ。

「(俺、探してくる、ピンズはどうする)」

「僕も一緒に行きます。二人で探した方が効率がいいと思います」

ドタバタと慌てて背中に飛び乗ったピンズを確認し、直ぐに空へと飛び立った。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

この場所は名前の通り、豊かな緑と起伏した地形からなるフィールドで、小さな生き物も身を隠しながらその豊かな恵みを豊富に得られる素晴らしい場所である。つまり俺が何を言いたいかというと、

「ギャオオオオオー！(アアーネー！どーこーだー！)」

マジで出て来てくれー!」

上空から奇声な声を上げて飛び回る奇怪な俺を見て、逃げ惑う小型モンスターは何度もみかけているのだが、アーネが一向に見つからない。探し始めてからもう一時間は経過していた。

だんだんと焦りで、余裕が無くなってくる。ピンズも小さな目をキョロキョロと動かし、探しているが、どうにも手詰まり状態だ。

どうする、下に降りて探すか? いや、俺が暴れて大きな音でも出せばアーネが気づくんじゃないか?

小さなアーネがこのモンスターハンターの厳しい世界で、生きていける筈はない。最悪の状況が頭の中に浮かんた。

そんな俺の心を読み取ったかのように、ピンズがでっかいドンガラがついたような鈍器で俺の眉間をぶっ叩いた。

「何を焦っているのですか、アーネさんは直ぐに見つかります! 落ち着いて下さい!」

「(だがっ……、っ……分かれている。すまない)」

ズキズキと眉間の痛みが頭に響いた。大した威力の攻撃ではなかった、ただこんな時こそ冷静でいなければならぬのに、できない自分に苛立っていた。よく考えるまでもなく、俺が暴れたってなんの役にも立たない。そんなことも分からなくなっている自分に、ピンズの最もな意見が心に痛んだ。

「イスクさん、もう少し向こうに飛んで見ますか?」

ピンズが此処から少し離れた大きな川の方を指差した。
そうだな、と言いかけて俺の心に一つの疑問が浮かんできた。

――アーネが一人でそんな遠くまで行けるのか？――

そうだ、アーネはまだ飛べない、移動できる距離など高が知れている。何故こんな簡単なことに今まで気付かなかったんだ。

更に空高く登り広大な大地を見下ろし、アーネがいないか探しながら元の場所に戻る為に翼を翻した。

「にゃ？来た道に戻るのですか？」

「（そうだ、アーネは一人で空を飛べない、だからそう遠くまで行けるはずないからな）」

「なるほど、では早く戻りましょう」

ピンズも俺の考えに納得がいったようで、もと来た道を探し始めた。数分飛んでいると、ピンズが何かに気づいたように声を上げた。

「あれは何ですか？」

「（何だ？）」

「あれですよ！あの大きな木の少し左の開けた場所です、何か砂煙が上がってるようですが……、あ……あの赤い巨体は頬に傷のあるあのリオレウスですよ！……何か追っている？」

凄い砂煙を巻き上げながら、何かを追うように走っているリオレウスを見つけた。

此処からだと、何を追っているのか砂煙で分からない。だがこの時俺は何故だか分からないが、直感的に追われているのがアーネであることが分かった。

「イスクさん！リオレウスに小さな火球を放っているのは、……あれはアーネさんじゃないですか！！」

「（わかってる！……しっかり掴まれ、このまま降りるぞ）」

ピンズは頭の角と角の間にしがみつこうように掴まった。一気に高度を下げ、リオレウスとアーネの間に飛び降りた。

――
――
――
――
――
――
――

砂が俺を取り囲むように舞い上がり、小さな岩や木々は吹き飛び一瞬の突風が辺りを飛び回った。

突然の侵入者に両方とも固まっていたが、先に動いたのは意外にもアーネの方であった。

「（イスクにいー！）」

俺の腹に飛び付くように駆け寄り、安心したのか目を真っ赤にさせてその目から小さな雫を零した。

宥めるようにアーネを翼で覆った。その光景を呆然と見ていたりオレウスが、意識をとり戻した様に怒りを顕わにさせながら吠えた。

「（きさま、私の獲物を横取りする気か！）」

翼の中でアーネがビクリと震えるのが分かった。ぎろりと睨みつけるようにコイツの目を見た。

「（うるせえ！アーネは俺の家族だ。お前のような奴の餌にされてたまるか！）」

「（誰が同族の雌を喰うか！珍しい鱗の色だから嫁にするのだ！！）
」

激しい火花を散らしながらにらみ合っていたが、今の一言で俺の頭は真っ白になった。

……なんだって？今コイツ嫁にするとか言ってなかったか？

呆然と見つめる俺に怪訝な顔をするリオレウス、……コイツ、素で“光源氏計画”を遂行するつもりだ。

「（こんのロリコンやろー！まだアーネは生まれたばかりだ、お前の嫁になんかなれるわけねえーだろがあああ！）」

俺はこれほど最低な奴を見たのは初めてだった。友達の中には二次元にどっぷりハマり込んで、借金まみれになっていた奴を見て知っていたが、そいつがとても可愛い奴なんだなと思えるくらの衝撃だった。なんせ、奴は生まれて数日の女の子相手に嫁にするなどとほざいているのだ。

侮蔑の籠もった視線を投げ続ける。奴は何かに気づいたように、慌てて弁明を始めた。

「（わ、私の嫁ではない、私の“息子”の嫁にするのだ！）」

だから何だと言うのだ、結局は自分好みの子を拉致して、理想の“娘”を作り上げようとしているだけではないか。

弁明にすらなっていない言葉を並べ立てるコイツは馬鹿なのだろうか。俺は3年前、こんな奴に殺されかけたのか……。

肩から力が抜けていく、体全体を使って馬鹿馬鹿しいと表現してみせた俺に相当腹を立てたのか、口から赤い炎をチロチロと零し、殺気の籠もった視線をぶつけてきた。

「（キサマは私を怒らせた、この地の主である私に許可なく侵入していることも許し難い。八つ裂きにしてやる）」

棘を逆立て翼を広げ、天を仰ぐ様に咆哮を上げた。

ふん、もともとアーネを渡すつもりもこの土地を出て行く気もないんだ。だったらやることは最初から決まっている、

「（主の座、降りて貰うぞ!）」

太陽が空の中心まで昇っている、その空を見上げながら腹の底から戦闘の合図である雄叫びを上げた。

第14話..消えた光（後書き）

どうも、ユーマです。

前書きにてお礼申し上げましたが、もう一度お礼申し上げます。本当にありがとうございます御座います。

私自身、本当にこんなにも多くの人達がこのような作品をクリックし、読んで頂けているなんて本当に驚いています。最初は本当に軽い気持ちで書き始めましたが、皆さまの応援のおかげで16話分も作品を書き上げることができました。ひとえに皆さまのおかげであると申せましょう。

次回の話は主人公側を書き進めたいと思います。そうです、リオレウス戦です。主人公は初めて飛竜と本気で戦います。

これから、少し忙しくなりますが頑張って更新したいと思いたいのです。でよろしく願います。

第15話：龍の歌

睨み合ってからどれぐらいの時間が流れただろうか、お互い視線を逸らさずに攻撃するタイミングを計る。

心地いいはずの風が鱗を逆撫でするようで気持ち悪い。張り詰めた空気が今にも音を立てて崩れそうだ。

「ガァァァァァー!!」

沈黙を破ったのは、リオレウスだった。強靱な牙をギラギラと輝かせ、俺目掛けて突っ込んでくる。

「グオオオオー！（舐めんなぁー!!）」

真っ直ぐに突っ込んで来た奴にタイミングを合わせ、顔目掛けて体ごと回した尻尾を叩きつけた。

もろに横面を殴られた奴は面白いように横に吹っ飛んだ。

「グァァァー！」

憎しみに満ちた雄叫びを上げる。すぐに立ち上がり、自慢の翼を広げ大空へと飛び立った。チャンスと思い、ブレスを放つも焦りから標準がズレ空へと消えていった。

「（私に一撃入れたぐらいでいいきになるなよ）」

高度を上げ、息を大きく吸った。

――くる

横に倒れるように転がる、つと同時に咆哮と風を斬る爆音が通り過ぎた。

火球は俺の真横を通り過ぎ、数メートル後ろの地面をえぐりかえした。

「（小癪な!!）」

翼を大きく羽ばたかせたかと思うと、こちらに向かって急降下してきた。

俺の真上を通り抜けるように通過し、通りがけに赤い炎弾を吐き出した。

背中に着弾した火球は凄まじい暑さとともに俺の鱗を焦がした。

――しばらくたってから激痛がはしった、…痛い、痛くて声がでない。

「（この程度ではすません、八つ裂きにしてくれるわ!）」

大空を舞うように戻ってくる奴を片目に見ながら、俺は自分の背中から痛みが退くの待っていた。

人間でいた時では考えられないような回復力、それは成長するに従ってどんどん早くなって来ている。

――いける!

バサッと一羽ばたきで空へと飛び立った。驚いたようにスピードを緩めたが、奴は嘲笑うように口角を上げた。

「(がはは、この私に空中戦を挑んでくるとはイイ度胸だ)」

ひらりと自分の優位を示すように、見事な方向転換を見せつける。確かに、飛ぶことに特化したともいえるリオレウスに空中戦を挑むことは無謀かもしれない…、だがこのまま地上にいても狙い打ちされるだけだ。

「(ああやってやるよ、これでも砦暮らしのせいで、かなり飛び回っていたからな!)」

手足と尾を使いバランスをとる、上手く気流に乗り一気に上空へと駆け上る。雲と雲の間を縫うようにリオレウス目掛けて飛びかかった。

無謀にも喉元を喰いちぎる勢いで飛びかかるが、奴は強靱な後ろ足と爪で俺の片翼を掴み、捻るようにねじ曲げた。

熱の塊をねじ込まれたような痛みが翼から伝わる。朦朧とする意識から抗うように奴の首筋に牙を立てた。

絡み合い、急速度で落下する。地面に着地できるギリギリのところで、お互い離れた。それでも翼に傷をおったために、俺だけ地面にうつ伏せるように倒れこんだ。

「グウウ(おのれ、この私が地面に引きずり落とされるとは……。だが我が毒爪にて、たつぷりと猛毒を注ぎ込んでやったわ)」

黒く変色した傷跡からは、とめどなく赤い液体が流れ出している。体が熱を持ち、じわじわと体力が奪われていくのが分かった。

「(はっ、こんなもん傷のうちにも入らねーよ)」

強がって立ち上がろうとするも、足に力が入らずに崩れるように

横たわった。

「（ワハハハハ、強がっているのは口だけか）」

奴は嘲るように後ろ脚で砂を蹴りまいあげた。

悔しいが、イーオスなどの毒とは比べものにならないくらい毒の周りも、痛みも激しい。今はなんとか意識を保っていられるが、後何分もつかわからない。

痛みで震える翼を落ち着かせようと力を入れればいれるほど、震えがます。口から涎が滴り落ち、泡がでる。

————マジでやばいな、毒が此処までたちが悪いとはな……。これでもこまめに毒キノコ食べて免疫力付けてるつもりだったんだがなあ————

ぼんやりとする頭で、そんなことを考えていると心地の良い音が聞こえてきた。幻聴のようにも思えるが、なんだか聞けば聞くほど意識がはつきりしてくる。

————なんだ？毒の痛みが消えていく……————

ゆっくりと頭を音のする方へ向けると、小さな体を力いっぱい使ってピンズが角笛を吹いていた。

「イスクさん、解毒笛と回復笛を吹きました！どうぞ思う存分戦って下さい！」

翼の痛みが引いて行くのを感じながら、もう一度足に力を入れて立ち上がった。ぐっと膝をまげ後足に力が入ることを確認する、ガリリと爪が地面を抉った。

「（なんだまだ立ち上がるのか、フンあのネコか……余計なことをしおって、だが削られた体力までは簡単には戻らんわ）」

「（動けるだけでも儲けもんだと思うがな、これでまだ勝負は分かんなくなつたな）」

「（粹がるな小僧！）」

ダツと駆け出したリオレウスは黒い黒煙を口からほとぼしらせながら向かって来る。黒煙の隙間から白く鋭い牙が俺を噛み千切らんと光っている。それが綺麗だと思ったのは恐怖のせいだと思いたい。すうっと心が落ち着く不思議な感覚が体を駆け、頭の中をもものすごい早さで電気が流れているようでバチバチと音が聞こえてきそう。電流の塊がふっと上に角に伝わり、消えた。

「（我が牙にて死ね！）」

目の前にせまる牙を前にしても不思議と落ち着いていた。角から口が伝わり今までに経験したことのないほどの電流の塊が口いっぱいに広まった。その塊を腹の底から出る空気に乗せるように吐き出した。

大地と空気を裂くように進む真黒な電気の塊がレーザーの様にまっすぐにのびリオレウスに着弾した。

「ツッ！？……」

着弾とともに空気が悲鳴をあげるような音が響いた。電流が体を通り抜けリオレウスは声をあげることもなく横に倒れた。

勝ったのか？

「（イスクにいー！）」

「イスクさーん」

呆然とする俺に、二人は飛び上がりながらこちらに駆けて来る、俺もふらふらとした足取りで二人に近寄った。

「（イスクにいスゴイ！何あの黒いの？）」

「本当に凄いです、あんな攻撃初めて見ました」

息を荒げて矢継ぎ早に話す二人を前にしても、俺の頭はまだ白い霧がかかったようであくらくらす。あの電気が駆け巡る感覚がなんだったのか、考えたいが思考が定まらない。

「イスクさん？」

そんなピンズの声聞いた気がするが、霞がかかる視界の中で意識を飛ばした。

――――なあ、まだ寝たりないのか？俺はずっと待ってるん
ぜ――――

薄暗く湿った空気とゴツゴツとした地面、俺は何をしているんだ？

「イスクさんまだ起きませんね、そろそろ夜が明けそうですが」

「（イスクにい……）」

「（ふん、こんな呑気そうな顔して寝ている奴に負けたとはな）」

いやに低い声が頭に響き目を薄っすらと開けてみると、大きな赤い物体が目に入った。は？てかさっきのリオレウスじゃん、……何この2匹は和んでいるのだろうか？いやてかここ何処だ？明らかに外ではなく洞窟の中だ。

「（……ここは何処だ？お前何を考えている）」

「イスクさん起きられたんですね、……こちらの方が我々をこの洞窟まで運んでくれたのですよ」

苦笑いを浮かべながら俺に説明してくれた

「（そうだ、そのリオレイアだけつれて行こうと思ったんだがな、泣いて怒ってお前を守ろうとそれどころではなかったのな、お前ごと連れて来たわけだ）」

まだそんなこと言っているのかコイツは、だが俺はともかくとして、あの草原に気を失った俺とピンズとアーネがいたら肉食モンスターーのいい餌になっていたかもな、

「（御託は聞き流してやる、ここは何処だ？お前の家か？）」

「（御託とはなんだ！もうすぐ来る《龍の歌》の為、息子に良き伴侶を見つけてやろうとしているだけだ！……ここは私の家だ）」

なんだまた変なことを言い出したな、寝起きの頭ではついていけない

「（……まで、その《龍の歌》とはなんだ？）」

「（なんだお前、龍のくせにそんなことも知らずに生きているのか？……こんな小僧に敗れるとはな、仕方がない、いいか《龍の歌》とは数千年に一度起こる、龍の大繁殖期のことだ）」

また面倒なことが起こる、そうおれの心が訴えかけていた。

第15話：龍の歌（後書き）

こんにちはお久しぶりです、ユーマです。

長い間お待たせしまして申し訳ありませんでした。

長期失踪している間も沢山の応援があり戻ってくることが出来ました、本当にありがとうございます。

これから、少しずつ返信したいと思いますので、よろしくお願い致します。

また次にいつ投稿できるか決められない状況にありまして、少しずつ投稿したいと考えております。

こんな作者ですが、どうぞ長い目で見守ってくれたらとても嬉しく思います。

さて、久しぶりにここ小説家になろうに戻ってきたのですが、何かものすごく変わっていてビックリいたしました。なんだか色々新しい機能が追加されていて感動しました。

そして久しぶりに、画面に向かって文章を打ってみたのですが、全く文にならずに愕然と致しました。17話前々からなぜか文にまとめることが難しく、本当に少しずつ書きためて作りました。改めて文章を作る難しさを感じました。

これから、この作品をどのように作り上げていこうかじっくり考えつつ、最後まで書き上げたいと思いますので、よろしく願います。

ではながながと失礼しました。

第16話：賑わう穴

昨日の敵は今日の友とはよく言ったもんだ。だが、日付が変わっていないということはまだ敵ということでもいいんだろうか。いいんだろ？ 誰かいいと言ってくれ：

俺の苦悩をよそに2匹は敵であるはずのリオレウスと仲良く夕食を囲んでいた。

「グウ（なるほど、アーネちゃんは戦いのセンスが飛び抜けているんだな、その歳でランゴスタを仕止めるとは我が息子にも教えて欲しいもんだ）」

「そうなんです！ アーネさんはすごいんです」

「クルル（えへへ、ありがとう）」

アーネはどこか照れくさそうに顔を赤くし、嬉しさから尻尾を左右振っている。ピンズはその横で誇らしげに頷いている。 いやいや、可笑しいだろ。

「グウ……（お前ら、打ち解けすぎじゃないか？）」

「ググル（なんだ？ 私とアーネちゃんが仲良くなって、嫉妬でも妬いているのか？）」

違う、アーネに気安く話しかけるな。ロリコンやろーめ。

「イスクさんも落ち着いて下さい。倒れているあなたをここまで運んで下さったのは、彼なんですから」

「（そうだぞ、きさまの重い体を引きずって私の家まで連れてきてやったんだ。感謝の言葉でも聞きたいところだ）」

分かっている、あのままだった広い草原に倒れていたら危険だったということくらい。いつハンターや肉食モンスターに襲われるかたまったものではないからな。だが、なんだか納得できない。いいのかそれで？

「ググル（良いではないか、あの場で勝負の決着は着いている。あの時から、この地の王はきさまに代わった）」

そんなもんなのか？

どうにもモヤモヤした気持ちのままだが、俺はめんどくさいので考えることを止めた。

「グルウ（そういえば、きさまは何故この地に来たのだ？……龍の歌を知らなかったことから、つがいを求めて来たわけでもあるまい）」

そうだな、家がないから引越しに来たとも言えいいのだろうか。まあアーネのことを考えると森丘が一番住みやすかったからな。

………だいたい、その龍の歌ってのが全く理解できないからな。なんだっけ？大繁盛期だったか？

「（そうだと教えただろうが、一度で覚えろ、めんどうだ。……きさまみたいな龍が誕生しているのだ、龍の歌は間もなく始まる。きさまも早く良き伴侶を見つけるんだな）」

薄ら笑いを浮かべ、俺を見るその目はどこか遠い空を見上げているようだった。というか、俺のこと馬鹿にしているのかもしれない。それと俺みたいな龍がいると何故、龍の歌が始まると分かるんだ

？俺みたいな雑種なんて良くいることだろう？

「グル（きさまのような古龍種が繁殖を始めていることが問題なんだ。古龍種はまず人前には現れない、ましてや目立つ繁殖など数十年に一度あるかないかだ。……私も風の噂であちらこちらで古龍種達が目覚めていると聞いているのでな、こうして古龍種の若僧を見て改めて実感した）」

なるほど、確かに古龍種は伝説級だったな。しかも俺なんかはミラールツの子供だしな、確かに大繁盛期の兆候って言えば兆候なのかもしれない。

まあ、俺にはあんまり関係ないかもな。とりあえず引越しが先だな

「（引越しか……。きさまこの巣で暮らすか？私はきさまに負けた身だ、住処を明け渡すのも仕方ない）」

「えー！駄目ですよ？イスクさんはそんなひどいことしませんよね？！」

「（イスクにい駄目だよ！）」

俺もお前の巣なんかに住みたくないぞ、そしてアーネはそんな泣きそうな顔しないでくれ……。

「（お前の巣なんかいらねーよ、それより俺達の巣を作るの手伝え！）」

「（きさまの巣をか？……わっはっはっ！よかろう、最高の巣をつくろうぞ）」

なんだか自信まんまんだな、なんでそんなに乗り気なんだ？

「（どうでもいいではないか、タイミングが合いすぎておかしかっただけだ。先日この森丘で素晴らしい立地条件の場所を見つけてな、私の別荘にしようか悩んでいたところなのだよ。此処からとんで数分のところだがいい場所だよ）」

ほう、それは最高じゃないか。さっそく案内してもらいたいところだが、

体があちこちまだ痛むからな、暫くは休息をとらせてもらおう。

「（好きにすればよい、私も体が痛いからな、数日はゆっくりしたい）」

そう言うとりオレウスは体を伸ばすように横になった。俺も体が休養を求めているらしく、お腹を満たすとすぐに眠気がおそってきた。

ぼんやりとする頭で俺はふと母親のことを思い出していた。

――――5年間修業しろってことは、5年後に帰ってこいってことなんだろうか…………

そんなことを考えている間にいつの間にか眠りに落ちていた。

第16話：賑わう穴（後書き）

お久しぶりです。ちゃらんぽらんな作者ですみません。

この話はリハビリみたいな感じで書きました。もしかしたら書き直すかもしれません。

大変ご迷惑おかけします。

感想、コメントありがとうございます。

全部読んでいるのですが、お返事できていなくて申し訳ございません。時間があれば書きたいと思っております。

不定期ですが、のんびりと書いていきたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6564f/>

雑種のどこが悪い！

2010年11月7日08時57分発行